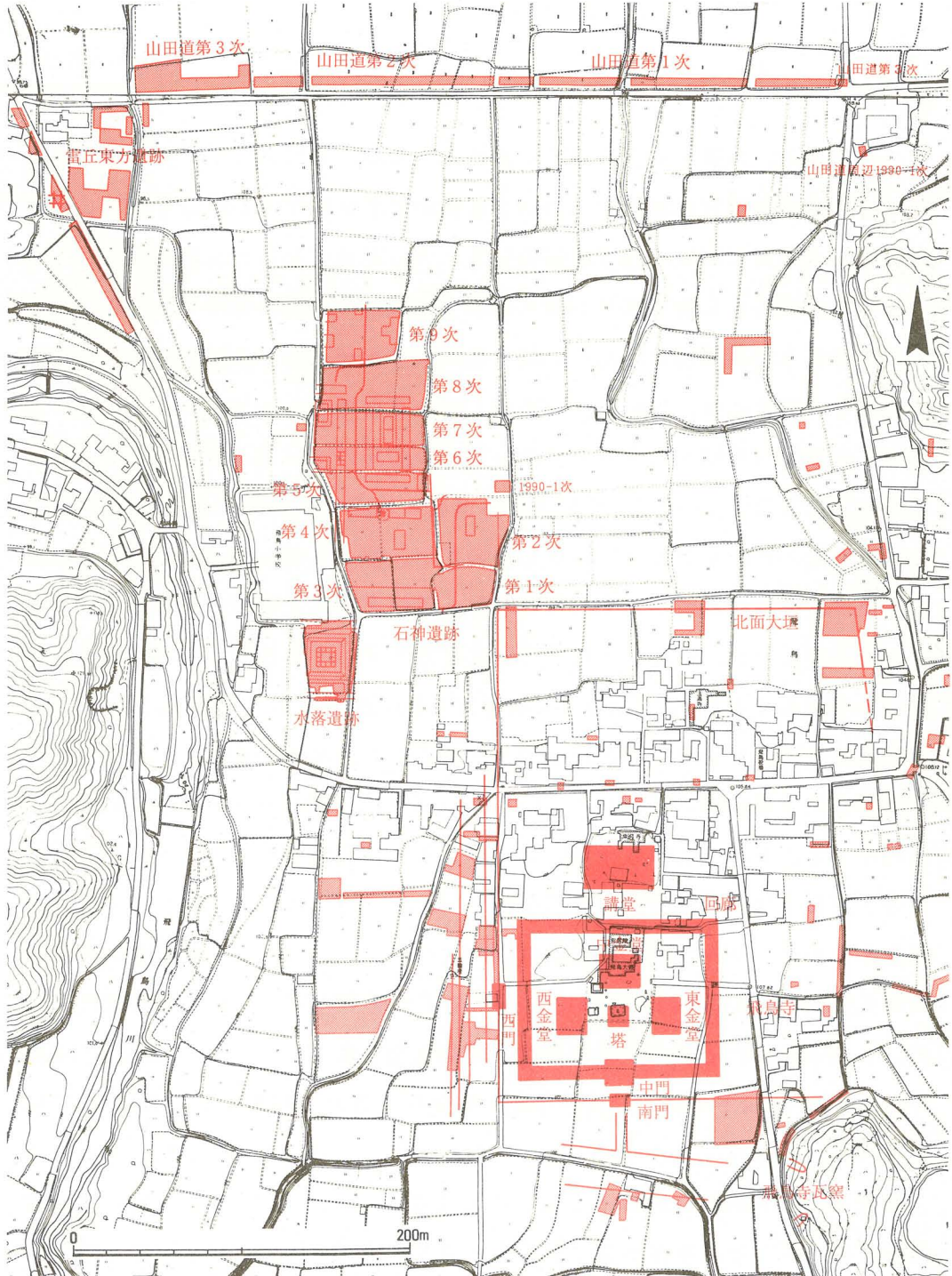


Ⅲ 飛鳥地域の調査



石神遺跡周辺調査位置図 (1 : 4000)

1 山田道第2・3次調査

(1990年1月～4月・1990年10月～11月)

はじめに

この調査は、県道「檀原神宮東口停車場飛鳥線」の拡幅工事に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山において昭和63年度から行っているもので、同年度の第1次調査については『概報20』ですでに報告したところである。

調査地は雷丘から東方桜井方面へ向かう現県道の北側の水田で、ほぼ中央を大官大寺から水落遺跡にいたる里道と吉野川分水が通り、また西端を百貫川が北流する。現県道は「山田道」を踏襲していると考えられており、また第2次調査区内東部に藤原京東京極大路およびその前身の中ッ道が想定できる。この一連の調査では、「山田道」に関連する遺構の検出と当地域の古代における土地利用状況の把握を主たる目的としたのだが、第1次調査では「山田道」に直接関連する遺構は見つからず、代わりに6世紀末から8世紀にわたる遺構が少なからず存在した。特に7世紀代の掘立柱建物のいくつかは「山田道」推定位置にまで及んでおり、「山田道」の位置ならびに時期について問題を提起することとなったのである。第2次・第3次調査は前回の成果を踏まえ、7世紀代を中心とする遺構群の広がりや「山田道」および「中ッ道」関連遺構の解明を目的として、それぞれ平成元年度および2年度に実施した。

第2次調査は第1次調査区の西で長さ145mを対象としたが、里道・分水をはさんで東区(106m)と西区(31.5m)に分けて行った。第3次調査はさらに西の延長66.5mと第1次調査区の東で9.4mの2ヶ所で行った。いずれも幅7～8.5m、一部拡張したところがあるので、発掘面積は第2次が973㎡、第3次が820㎡となった。以下では、二次分の調査結果をまとめて報告することにしたい。

遺 構

調査対象地が総延長200mを超え、しかも東から西へ下がる緩斜面にあたるため、東と西では層序がかなり異なる。第2次東区東部では耕土・床土の下に暗茶褐色砂質土があり、中央部東半では床土の下が黄褐色粘質土、中央部西半

では暗褐色粘土・黄褐色粘土、西部では灰色粘土・暗灰色茶砂質土・暗灰色粘土・青灰色砂混じり暗灰色粘土・黒褐色粘土がある。西区は、耕土・床土・暗灰褐色粘質土・青灰色砂質土・青灰色砂混じり暗灰色粘土・黒褐色粘土の順である。遺構検出は東区東半では床土直下の暗茶褐色砂質土や黄褐色粘質土の上面で行い、東区中央部西半では黄褐色粘土の上面、西部では青灰色砂質土や青灰色砂混じり暗灰色粘土の上面で行ったが、東端では暗茶褐色砂質土の下層、西部では黒褐色粘土の下層でも遺構を検出した。

第3次調査区東部では床土直下が青灰色砂質土の整地層である。中央部では間に暗灰色砂混粘質土が入るが、遺構検出面は東部と同じである。西部では床土の下に黄褐色粘質土が介在し、その下の黄灰褐色粘質土の地山面で遺構を検出した。南半部ではその上を礫敷SX2633が覆っている。

検出した遺構には掘立柱建物14棟以上・同堀6条以上、竪穴住居跡4棟、河川跡1、素掘り溝、杭列、土坑などと、塊石を詰めた暗渠3条を伴う大規模な整地層がある。これらの遺構は弥生時代・古墳時代・7～8世紀代および中世にわたる。

弥生時代の遺構 第2次東区東端の7世紀代の整地土下層で検出したSD2510がある。南で東に彎曲する弧状の南北溝で、幅2m、深さ1.2m、断面形はV字形。東南延長部が第1次調査Ⅳ区西南隅で確認されている。弥生時代中期末の土器が出土した。集落の西を画す環濠の可能性が強い。溝から西では弥生時代の遺構・遺物が希薄であった。

古墳時代の遺構 第2次東区中央の河川跡SD2570をはさんでその両岸で、竪穴住居跡SB2544・2556・2558・2560と掘立柱建物SB2541・2575などを検出した。SD2570は北々西に流れる小河川の跡。幅2.6～4.5m、深さ1mある。堆積層から多量の布留式土器のほか、少量の朝鮮半島系土器、木製鞘などが出土した。

SB2544は一辺推定約4.5mの、SB2556は一辺4.3m・深さ15cm、SB2560は一辺5.7m・深さ5cmのいずれも方形竪穴住居跡。SB2556は東辺に一段高い部分があり、またSB2560は南辺ほぼ中央にピットを伴う。SB2558は規模不明だがSB2560と重複しこれより古い。掘立柱建物SB2541は柱間1.85～1.9mの2間×2間

以上、SB2575は梁行1.3m・桁行2.0m。竪穴住居跡と同じく、SD2570に平行する方位をとる。5世紀後半のもの。

第3次調査区の西部で検出した南北溝SD2634もほぼ同時期で、振れも同じである。

7世紀代の遺構 掘立柱建物・塀は第2次東区の東端と中央東部に分布する。ほぼ方眼方位にのるものと北でやや大きく東に振れるものがある。

北でわずかに東に振れる建物・塀は、SB2501・2502・2506、SA2507・2508である。

SB2501は、柱間3.0m（10尺）等間。南北棟の北妻か。柱掘形に山土が少量混じる。SB2502は、東西棟か南北棟か不明。東西方向の柱掘形長辺1.1～1.2m、柱間2.25m（7.5尺）等間。柱抜き取り穴に黄色の山土が詰まる。整地土との関係でSB2501より古い。SB2506は、南北棟の南妻を検出。柱間1.5m（5尺）等間。東の柱穴に柱根が残る。SA2507と2508は、1.8m（6尺）を隔てて平行する塀。あるいは両者が一体で建物となるかもしれない。柱間2.5m等間。柱抜き取り穴に黄色の山土が詰まる。

北でやや大きく東に振れる建物・塀には、SB2518・2520・2521・2549・2550・2551・2552・2555・2559、SA2515・2517・2526・2534がある。

SB2518は、建物の方向は不明だが、東西方向の東2間は柱間3.3m（11尺）等間、西端と南北方向の柱間1.8m（6尺）。総柱で西に庇が取り付くか。SB2520・2521もこれらと重複する南北棟建物である。柱間1.8m（6尺）。3棟の建物は柱穴の重複関係から、SB2518→SB2521→SB2520の順である。SB2549～2552・2555・2559はSD2539の西、古墳時代の竪穴住居跡と重複して検出した掘立柱南北棟建物。SB2549～2551・2552は、ともに梁行1.5m（5尺）。桁行は、SB2550が2.1m（7尺）、SB2551が1.5m（5尺）、SB2552が1.8m（6尺）である。SB2551は総柱建物。SB2555も梁行1.5m（5尺）の総柱建物だろう。

SB2552は、梁行1.65m（5.5尺）、桁行1.8m（6尺）の南北棟。SB2559は、梁行1.95m（6.5尺）、桁行1.8m（6尺）の南北棟。SB2552・2555・2559は柱穴が重複し、SB2559が他の2棟より古い。掘立柱南北塀SA2526は柱間2.1m（7尺）、SA2534

は柱間約 2 m。

これらの掘立柱建物を区画するように、2ヶ所の掘立柱建物・塀の間に北で東に振れる南北溝 4 条がある。SD2524は最大幅1.0m、深さ0.3m。SD2525は幅 1～1.3m、深さ0.3m。埋土はともに砂や小石を含んだ暗灰色粘土で、SD2525は底に粗砂が溜る。SD2530は幅1.5m、深さ0.2m、埋土は暗灰色砂質土。SD 2539は幅1.7m、深さ0.25m、埋土は暗灰色粘土。これらの南北溝は掘立柱建物・塀と方位を同じくし、同時期と思われるが、重複するものがある。SD2525はSA2526・SB2518より古く、SD2524はSB2518より新しい。

第 3 次調査区で検出した建物は 1 棟のみである。掘立柱建物SB2631は東西 4 間（柱間2.4m、8尺等間）×南北 2 間以上（柱間2.1m、7尺）の規模で、大部分の柱穴は地山面で検出したが、東端の 2 個のみは整地土から掘り込んでいた。しかも南北溝SD2625に切られているので、7世紀後半に位置づけられる。掘形は一辺 1 m内外の隅丸方形だが、浅く柱痕跡も残っていない。北で若干西に振れる。

これらの遺構は、出土遺物や第 1 次調査の成果からみて、7世紀中頃から後半にあたる。

石組暗渠を伴う大規模な整地 現在の地形でもわかるように、調査地は全体に西に緩く傾斜し、雷丘との間が谷状の地形となっている。第 2 次調査東区の東西両端では高低差が約1.5mある。東区中央部以西の遺構検出面である青灰色砂質土と青灰色砂混じり暗灰色粘土そしてその下層の黒褐色粘土は、この谷状の地形を埋め立てた大規模な整地土層である。整地土層は西方へも広がり、第 3 次調査区の西部まで続き、東西幅は110mにも達する。谷状地形の西端部はほぼ方眼方位に則って直に立ち上がっており（SX2630）、落込みに沿って堆積した黒褐色土から 6 世紀末に位置づけられる「飛鳥寺下層」式の土器類が一括して出土した。整地は植物繊維を多量に含んだ堆積層の上に施されているが、大きくは 2 層に分かれ、粘質の土を下層に積み、上層には青灰色の砂を置く。整地土は厚さ0.6mほどあり、旧地形に沿って北で厚くなる。この整地土中には、7世紀前半の土器と、少量の瓦を含む。また、青灰色の砂層には 6 世紀代の円

筒埴輪の破片も含まれていた。

整地土下には3条の石詰め暗渠がある。3条とも浅い据え付けの溝を掘った中に作られ、整地土で埋め立てられているので、整地作業と一連の工程によるものである。

東西方向の石詰め暗渠SX2601は幅0.8~1m、東でわずかに北に振れる。石は、拳大から一抱えもある大きさまであって一定しない。石の積み方はかなり粗雑である。底石や側石はなく、一定の幅に石を積み上げただけで、石に隙間を作ることによって水の通り道としたようである。検出した東西方向の長さは約80mである。東では南北方向の石組石詰め暗渠SX2600に接続し、西では南北暗渠SX2622につながる。SX2600は、長さ0.4~0.6mほどの大型の石をたてて側石とし、溝の中に人頭大の石を詰める。幅約0.5m、深さ0.7m、北でわずかに



山田道第2次調査東区 暗渠SX2600・SX2601実測図(1:50)

西に振れる。南北約4m分を検出した。南端では小口に側石を立てていない。石の上面には粘土を厚さ10~15cm、幅約1.6mほどかぶせて密封するが、SX2601との接続部分ではこの粘土を剥し、SX2600の西側石に榛原石の大型板石をかぶせている。SX2622は北へゆくほど幅を増している。2条の南北方向暗渠SX2600と2622は、傾斜変換線に作られたSX2601が受けた水を北へ排水するものであろう。

7世紀末~8世紀の遺構 SD2540は調査区の北壁にそって検出した東西方向の素掘り溝である。東端は調査区北外にそれる。第2次西区で確認した溝幅は約2.5m、深さは0.3m~0.6m。先に述べた整地土層を切り込んで掘削されており、また調査区東端の掘立柱建物や南北溝などより新しい。7世紀末~8世紀前半の土器を含む。東区西部や西区ではこのSD2540の南には少数の溝や土坑があるだけで顕著な遺構がなかった。この部分が道路SF2607で、SD2540はその北側溝であった可能性が高い。SD2540は第3次調査区へと延び、40m西で南北方向のSD2625と合流することを調査区の壁面で確認した。

第3次調査区中央部に3条の南北溝SD2623・2624・2625が等間隔で並ぶ。いずれも素掘りの浅いU字溝で、北流する。堆積土は粗砂で多量の土器類の他、金銅製鈴、帯金具、和同開珎が出土した。これらの土器の年代、および青灰色整地土面で検出したこと、またSD2625には調査区北端の東西溝SD2540が合流しているので、これらは7世紀末~8世紀前半のものと考えられる。

石敷SX2633は西部南半に広がる礫層で、人工的に敷いた可能性が強い。北端は中世の溝SD2636で切られているが、東西溝SD2627を北側溝とする路面敷きの可能性もあり、東のSF2607に対応するかもしれない。

遺物

木簡 第3次調査において4点出土した。うち1点は削屑である。

(1)・□□マ □□□□

 亀甘マ 伊艾□

 ・ □□□ (SD2623出土)

(2) 僧□□ (SD2625出土)

瓦罎類 第2・3次調査で出土した瓦罎類は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・

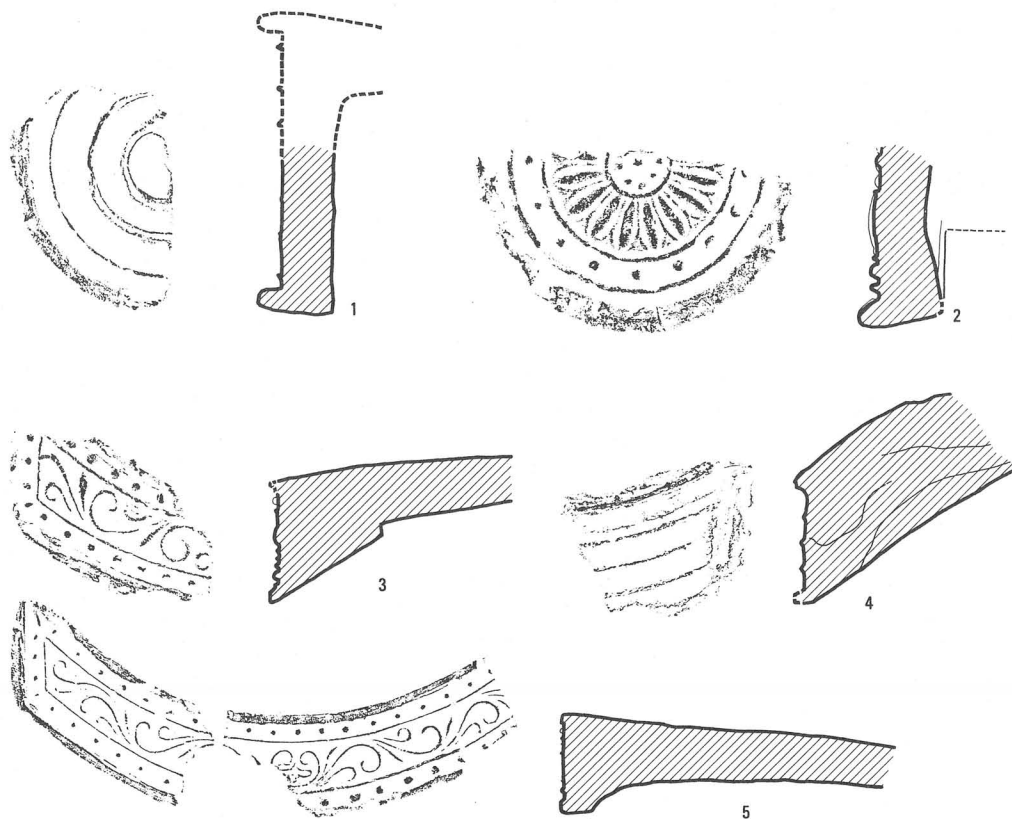
瓦製土管などである。軒瓦は第3次調査区から軒丸瓦6点、軒平瓦6点の計12点が出土した。藤原宮式軒丸瓦1点(6274型式Ab種)を除いて、すべて奈良時代の軒瓦である。その内訳は、以下の通りである。

軒丸瓦：平城宮6285型式A種2点、同6296型式A種1点、難波宮6014型式1点、奈良時代型式不明1点。

軒平瓦：平城宮6691型式F種3点、同6721型式D種1点、6574型式新種1点、難波宮6664型式B種1点。

(1)は三重圏の重圏紋軒丸瓦。外側の第三圏と外縁との間が狭く、外縁は直立気味の傾斜縁。難波宮6014と胎土・焼成も酷似し、同範とみて間違いない。(2)は平城宮6296と同範。

難波宮6664B(3)は3回反転均整唐草紋軒平瓦。花頭形中心飾り基部は2本線、先端がわずかに開く。難波宮出土品と胎土や製作技法が一致する。6691F(5)は



山田道第3次調査出土軒瓦(1:4)

四回反転均整唐草紋。花頭形中心飾り基部は一本線で、先端が開かない。第1次調査でも1点出土した。(4)は重郭紋軒平瓦。一重の方郭内に弧線を一条入れる。平城宮・難波宮の6574のいずれとも別範。この他、第1次調査で平城宮6320型式A種(a・b不明)が出土している。

丸・平瓦は、整地土から少量の飛鳥時代の瓦が出土したが、第3次調査の瓦は平瓦が圧倒的に多く、ほとんどが縦位縄叩き一枚作りの奈良時代のもの。側面と端面に縄叩きを行うものがある。歌姫西瓦窯の製品か。

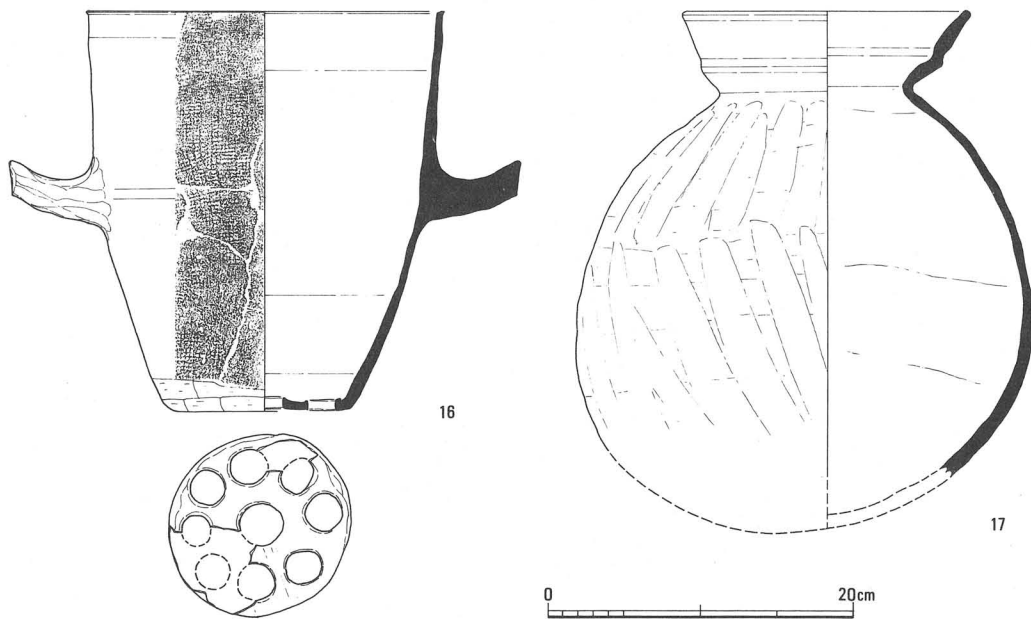
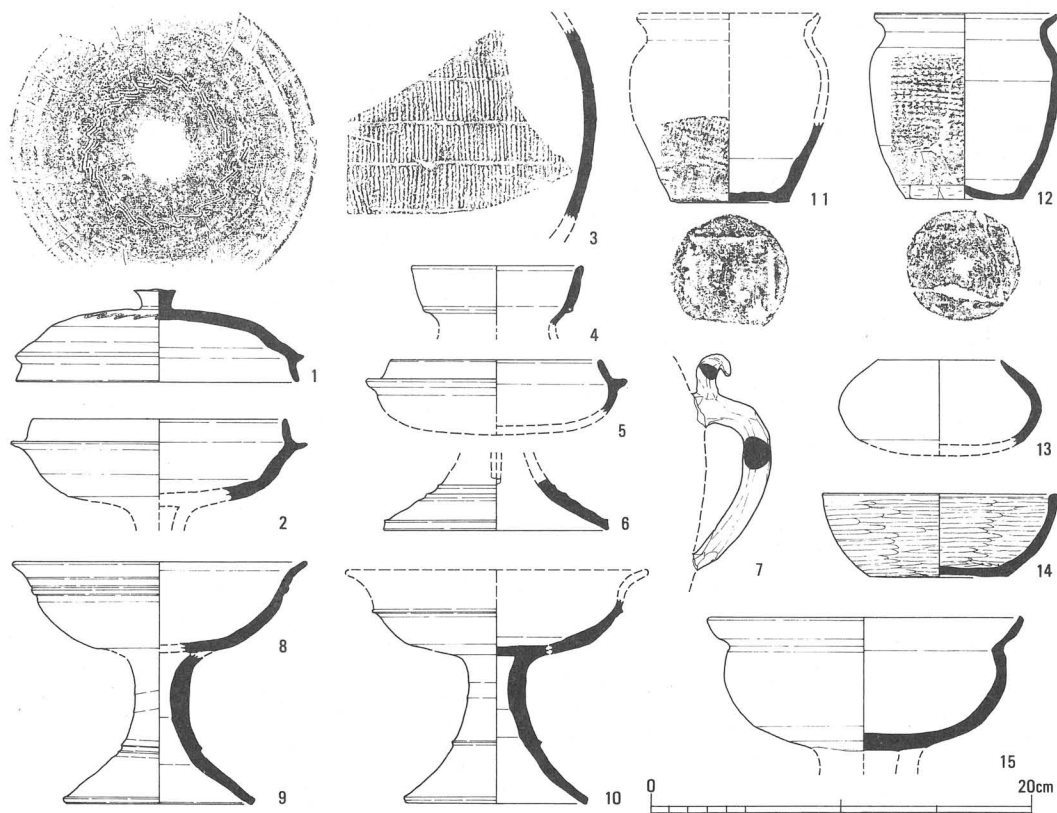
以上の奈良時代の軒瓦のうち、平城宮のものは6285Aを除いて第Ⅲ-1・2期の型式である。6691Fは平城宮よりも平城京での出土が目立つ。6691Aは平城宮では、6320Abあるいは6296Aと組み合っており、今回出土した6691Fもこれらと組み合っていた可能性がある。また、6285Aは軒平瓦6667Aと組み、6285B-6691A(法隆寺東院・東大寺仏餉屋下層)の祖形となったものである。

難波宮の所用瓦の出土も注目される。調査地近辺では、中心に「右」の逆字をいれた重圈紋軒丸瓦(6015A)が藤原宮西北隅(第36次)から出土していることが知られるだけであった。今回出土した難波宮同範瓦は、小治田宮との関連からも今後の調査検討を必要としよう。

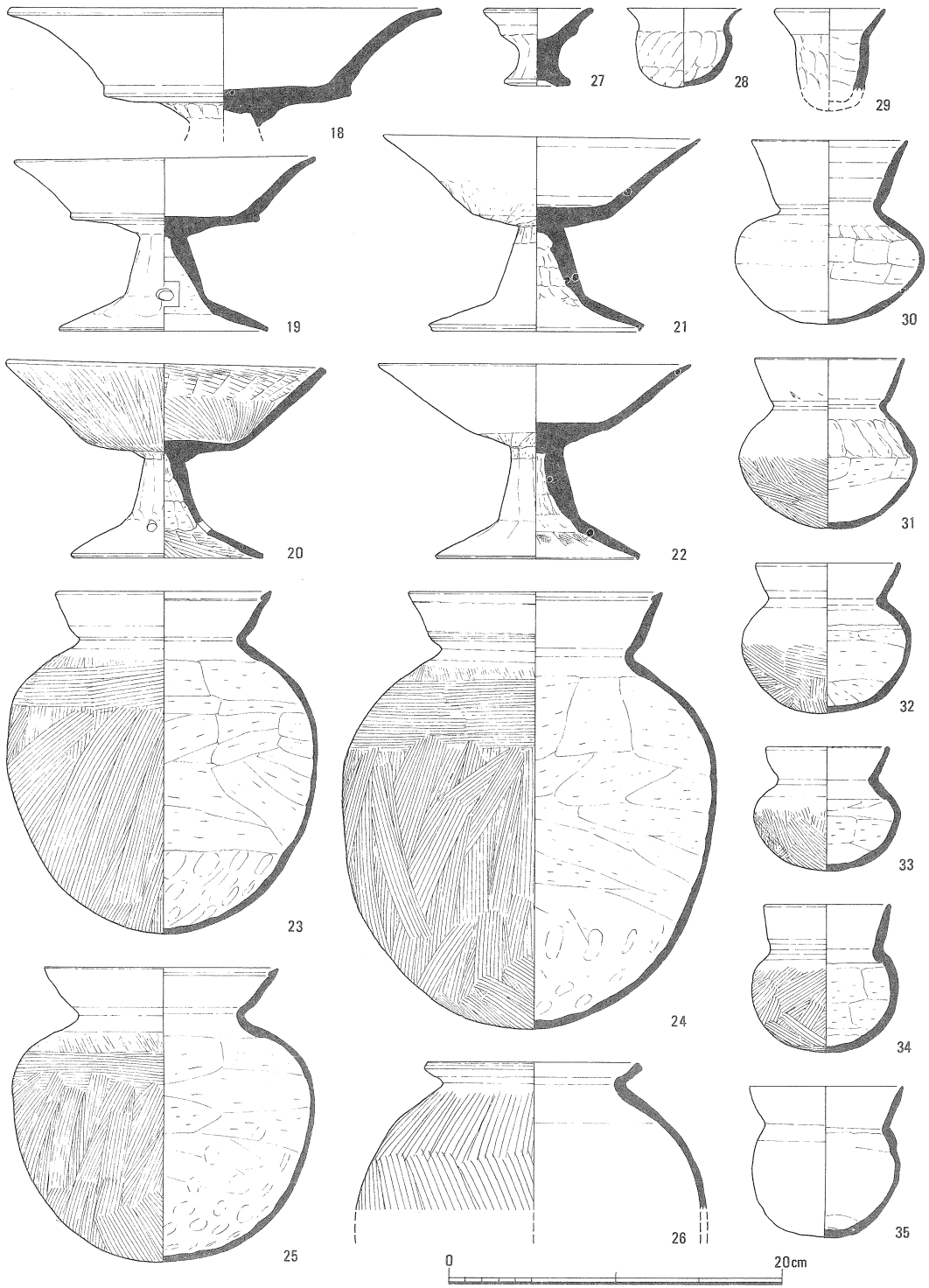
土器類 時期の上では弥生時代中期、後期、古墳時代前期末、6世紀末、7世紀前半、7世紀末から8世紀前半の土器が比較的多量にあり、飛鳥地域の遺跡の変遷をたどる上で重要である。いずれも整理途上にあり、ここでは、飛鳥地域の開発を示す、2つの時期の土器群について、簡単に紹介する。

古墳時代の河川跡SD2570から出土した土器群は、上・中・下の3層に大別される。下層は土師器ばかりであるが、上・中層には多量の土師器に混じって、硬質・軟質の朝鮮半島系の土器が少量含まれている。しかし陶邑窯産の初期須恵器とみられるものは含まれていない。ここでは、朝鮮半島系の土器の大半と、それに伴う上層出土の土師器を抽出して図示した。

朝鮮半島系土器の器種は、硬質のものに有蓋高杯(2・5・6)、蓋(1)、縄蓆文叩き壺(3)、甕、小型壺(4)、把手(7)などがあり、軟質のものには、無蓋高杯(8・9・10)、杯(13・14)、平底鉢形土器(11・12)、甕、壺(17)、甌(16)、



SD2570出土土器① (1~7:硬質, 8~17:軟質, 16・17は $\frac{1}{5}$, 他は $\frac{1}{4}$)



SD2570出土土器② (18~35 : 土師器, 27・28は下層、他は上層)

台付鉢(15)などがある。いずれも各器種1～数点と少量であるうえに、胎土・色調・調整手法をも加味すると、それぞれで異なる特徴がある。

硬質の有蓋高杯(2)と蓋(1)は、砂粒の多い胎土で、白色の灰が厚くかぶった灰色を呈する点で互いに酷似している。壺口縁(4)、有蓋高杯(5)、高杯脚(6)も硬質で、精良な胎土と灰緑色の光沢のある色調が共通している。縄蓆文叩きの壺(3)は細かな砂粒の多い胎土で青灰色。把手(7)は鉢あるいは壺の把手とみられ、上部に形骸化した鍵形の飾りがある。暗赤色。

軟質の無蓋高杯(8～10)は、ともに須恵器に通ずる器形であるが、(8)は全面黒色で表面は磨いているようである。(10)は明るい黄褐色を呈し、杯部底をロクロ削りで仕上げており、「赤焼土器」に似ている。二重口縁の壺(17)は、土師器壺に類似した器形であるが、粗雑ななでと軽い篋削りによる調整と白灰色の色調は半島系土器であることを示している。

軟質の平底鉢形土器の外表面調整手法には、格子叩き(12)、平行叩き、縄蓆文叩き(11)の別があり、底には方形の圧痕がある。なお(12)の底には中央に絞り上げたような円錐形の盛り上がりがあり、成形法と関わる点で興味深い。茶褐色の台付鉢(15)はあまり類例が無いが、金海地域の陶質土器に類似した器形がみられる。杯(13・14)も希有な資料であり、中でも(14)は無蓋高杯(8)と同じく、漆黒色で内外面を磨いている。甗(16)は円筒形平底の体部中程に棒状の把手をつけ、底に小円孔を穿つ。体部は細かな格子叩き。把手の高さに浅く幅広い沈線が部分的に巡る。他に「く」字形に外反する短い口縁をもつ細かい平行叩きの甗があり、やや広い面をなす端部に沈線を刻む。

これらと伴出する土師器には、甗・壺・小型丸底土器・高杯などがある。飛鳥地域の古式土師器の細分をした木下・安達論文の型式分類に従うと、甗では、口縁部が内側に面をなして肥厚する甗Abがその大半を占め、甗Acがそれに次ぐものの、甗Aaは見られない。また、安達分類のⅢB～ⅣA類のS字状口縁台付甗(26)が少量含まれる。高杯は、大きく外反する杯部で、脚部との境を篋削りする高杯Ab・Acが主体を占め、杯部が椀形のものはない。上層には、わずかに数個体、杯部内外面と脚部裾内面を刷毛目調整するもの(20)が含ま

れる。脚の透かし孔は、1個(19)、あるいは3個(20)のものがあるが、大半は、透かし孔を穿っていない。この点では上・中層と下層とにおいての差はみられない。小型丸底土器では、外面を刷毛目調整するD・E類が主体で、中・下層に外面を削る個体が含まれる。なお、少量のミニチュア土器(27~29)が上・下層から出土している。

こうした内容は、遺構の東750mに位置する「上ノ井手遺跡」の井戸SE031上層・下層に類似し、須恵器出現期直前の様相を示す一括資料として極めて良好である。土器群の上・中層に限って、朝鮮半島系の土器が伴出することは、飛鳥地域にこれらが流入した時期の土師器を限定できる点でも貴重で、それら朝鮮半島系土器が渡来人の什器であるとするならば、飛鳥地域に配置され、その開発の一翼を担った渡来人の出自・構成などをさぐる手がかりになるろう。

いま一つの飛鳥の開発とかかわる土器群は、3次調査西端の整形した地山に沿って堆積した土層である黒褐色土に含まれる土器群である。黒褐色土は、7世紀に継続的に営まれる飛鳥地域の本格的な開発の開始と深く関わりと考えられ、含まれる土器群は、飛鳥寺造営直前の時期を示す。須恵器・土師器があり、須恵器杯は大きくはTK43型式に属す。土師器は杯類が、暗文をもたない杯Gと底部の外面を篋削りする杯Hで構成され、甕・壺類も小墾田宮推定地SD50下層資料と酷似している。量的に恵まれないが、須恵器は従来、6世紀末の年代基準とされてきた飛鳥寺下層の土器より良好である。黒褐色土層の上層にあたる「整地土」の土器が、飛鳥地域土器編年のI段階にあり、これ以後の年代的推移は主に土師器の型式変遷が手がかりとなっていることからすれば、土師器杯G・Hを連続的に検討することのできる点でも貴重な資料である。

金属製品その他 金属製品には第3次調査の2条の南北溝(SD2624・2625)から出土した金銅製鈴、鉄製鎖状金具、黒漆塗帯金具、および隸開の和同開珎があり、遺構の存続時期・性格を示唆する。遺構を覆う包含層からは隆平永寶が出土しており、「小治田宮」の記録との関連は興味深い。

土製品では、先述の南北溝に土馬があり、「万□」(須恵器杯B底部外面)、「日置」(須恵器蓋天井部外面)の墨書土器がある。その他、包含層からは、円面

硯、製塩土器、漆付着の土器、埴輪等が出土している。

石製品には砥石の他、弥生時代の石匙、縄文時代の石棒等がある。

木製品では、古墳時代の河川跡SD2570出土の木製鞘が貴重な資料である。

ま と め

第1次調査以来、推定「山田道」の北側を平均幅8m、総延長420mにわたって調査してきた。これはいわば飛鳥地域の中央部を貫通する東西方向のトレンチを入れたことになり、古代におけるこの地の利用状況の一端を窺うことができたのは大きな収穫である。

遺構としては未確認であるが、石棒などの遺物が出土しており、縄文晩期には人々が生活し始めていた可能性が強い。間が途切れるが、弥生中期末になると、比較的多くの遺構が主として東半部の微高地に営まれるようになった。このうち、第2次調査区東端のSD2510は集落を囲む環濠の西の一部である可能性が強く、古墳時代になると、重複した竪穴住居や多量の土器を含む溝などの存在によって、継続的な土地利用が想定できる。

古代に関わる最大の成果は、第2次調査東区西部から第3次調査区の東3分の2にわたる東西幅110mを超える沼状地形の存在である。この沼状地形は、塊石を詰めた暗渠を伴う大規模な整地によって埋め立てられており、さらに北方へと大きく広がっていると思われる。整地土は現状でも厚さ60cmあって、しかも北へゆくほど厚くなるので、きわめて大規模な土木工事であったと思われる。飛鳥盆地北部の大官大寺周辺でも黄褐色の山土を含むもう一つ別の整地土の広がり確認されており、7世紀前半における飛鳥地域の大開発を物語るものである。

第3次調査区の西方一帯に「雷丘東方遺跡」が広がる。「小治田宮」墨書土器の出土によって奈良時代の小治田宮がこの地域に存在した可能性が強まったのであるが、第3次調査区西部から11点もの奈良時代軒瓦とそれに伴う丸・平瓦がかなりの量出土したことによって、その蓋然性はますます高まった。特に難波宮と同範の軒瓦の出土が注目され、今後行う周辺の調査にますます期待がかかるのである。

2 石神遺跡第9次調査

(1990年7月～1991年4月)

1981年からはじまった石神遺跡の調査は今回で9回目となった。これまで、旧飛鳥小学校東側の南北里道に沿って調査区を北へ進めてきており、今回も第8次調査区の北に接する水田を対象とした。調査面積は約1200㎡で、第1次調査からの調査総面積は約10450㎡に達する。

遺 構

調査区の基本的な層序は、耕土、床土、灰褐色土、茶褐色土、暗褐色土で、その下が黒褐色土の整地土面となる。遺構はこの整地土上面で検出したが、西10mほどは後世、整地土面が失われている部分が多く、地山の青灰色微砂上面が検出面となった。また、東南部分は灰褐色土下がすぐ黒褐色整地土面となる。全体の自然地形は西北へ傾斜する。南半部分は東西の地山面の比高差はほとんどないが、北端では約55cm、南北の比高差は東端で約40cm、西端では約1mとなる。検出した主な遺構は、7世紀中頃から8世紀にわたるもので、これらは大きくA期(7世紀中頃:齊明朝)、B期(7世紀後半:天武朝)、C期(7世紀末～8世紀初頭:藤原宮期)、D期(8世紀前半:奈良時代)にわけられる。A～C期については第8次調査の報告(概報19)の時期区分と同様であるが、今回は奈良時代に属する遺構を検出したので、これをD期とした。

<A期>飛鳥寺・水落遺跡の北に東西大垣SA600ができ、石神遺跡の形成された時期である。従来、第4次調査で検出した井戸SE800から発する石組溝と建物の変遷から3小期に細分されており、今回もこれを踏襲する。

(A-1期) 石組溝SD1210・1345、掘立柱建物SB1550、掘立柱塀SA1524・1525がある。調査区中央を走る南北石組溝SD1210は、第7次調査で初めて検出したものである。最下段の側石しか残っていないが、40cm大の石をつかう。内法幅20cmで、砂がいっぱいに堆積していた。北にさらにのびる。南北石組溝SD1345は第8次調査で検出したもので、後述のA-2期の南北石組溝SD900のすぐ東にある。調査区北端近くで、2.5m分を確認した。内法幅1.5mで、側石は東

は20～25cm大の1段分、西は10～20cm大の石が2～3段残っていた。溝中は砂が堆積する。第8次調査では幅1mであったが、今回は調査区北半部で幅が広がる。溝幅からみて開渠であろう。この溝も井戸SE800から発するものか。SB1550は調査区西壁面に東側柱列5間分を検出したものである。A-3期のSB1545の柱掘形と重複し、これよりも古い。柱掘形は一辺約1.2mと大きい。柱間寸法は2m。南北塀SA1524は4間分を検出。柱間寸法2.2m。これと逆L字状に接続する東西塀SA1525は2間である。柱間寸法2.2m。西側の柱掘形はA-2期のSB1540と重複し、これよりも古い。SB1550の南側柱はSA1525とほぼ揃う。

(A-2期) 石組溝SD900・1520、掘立柱建物SB1485・1325・1530・1540がある。井戸SE800から発する南北石組溝SD900は調査区のさらに北へのびており、総延長は120mをこえる。溝掘形の幅約2m、石組の内法幅65～85cmで、側石はほとんど最下段しか残っていない。50～60cm大の石を横長におき、下端のすき間に小石をつめる。底石はない。石組内には砂質土が堆積していた。内法幅はこれまで50～60cm前後であるが、今回はやや広くなっており、北で東にやや振れてきている。この溝は暗渠と考えてきているが、第8次調査の東西棟建物SB1320の北側から開渠となっていた可能性がある。SD900の東側約4.5mに南北棟建物SB1485とSB1325とが東側柱筋を揃えて南北に並ぶ。SB1485は桁行9間・梁行3間で、柱間寸法は桁行2～2.1m・梁行1.4mである。東側柱から約60cm東の位置に、東側に面を揃えた南北石列SX1486がごく一部であるが残っており、この建物の基壇縁石と考えられる。内側にもう1石を並べている。建物基壇には黄褐色山土が入っているが、柱をたてた後に基壇土を入れているため、上面では柱掘形はみえず、柱抜取穴が不整円形に見えるだけである。柱掘形は一辺1.2m前後の大きさで、深さ約80cmだが、梁行の中の間柱は一辺70cm前後と小さく、深さも他の柱より20～30cm浅い。SB1325は第8次調査で南北柱列を2間分検出していたが、今回、北側柱列を検出した結果、桁行4間・梁行2間の南北棟建物となった。柱間寸法は桁行2m・梁行2.3mとなる。柱掘形はSB1485と同様、側柱列は大きいですが、妻柱は小さい。この建物部分にも基壇土の黄褐色山土がのっており、SB1485と一連の作業工程がうかがえる。両者の間隔は



石神遺跡第9次調査遺構配置図

2 mしかなく、極めて近接した状況である。この2棟の南北棟は第8次調査区の東西棟建物SB1320と東側柱列を揃え、逆L字状に並ぶ。方位は北でやや東に振れる。石組溝SD900の西約13.5mには、建物SB1530とSB1540とが東側柱列をほぼ揃え、約7.5mの間隔をもって南北に並ぶ。両者とも東西3間・南北3間の総柱建物である。SB1530は柱間寸法が1.4m等間で正方形である。SB1540は東西1.9m・南北1.4mの東西棟建物である。柱掘形は両者とも一辺90cm前後で、各々1本ずつ柱根が残る。南北石組溝SD1520は内法幅約30cmで、20cm大の側石が1段残る。底に5～10cm大の礫をしく。SB1530・SB1540の東側柱列から約1.5mで、両建物の雨落溝と考えられる。

(A-3期) 南北石組溝SD900は存続するが、他の建物はすべてこわされる。掘立柱建物SB1480・1500・1510・1535・1545がある。石組溝SD900の東区画には特異な平面形態のSB1480が建つ。西側部分のみで東側は調査区外となるため、全体の規模・形状は明らかではないが、現状では、2間×2間の空間が四方に突出した十字形の建物の可能性がある。建物内部には柱がない。柱間は2.5m等間で、建物の南北長は15mである。柱掘形は一辺1～1.5mと大きく、西側柱列の掘形にはA-2期SB1485の基壇縁石に使われていたとみられる礫が入る。柱掘形の深さは約80cmであるが、西側柱列の妻柱は約35cmと浅い。また、この時期に特徴的な黄色粘土をつめ込んだ柱抜取穴はみられない。建物方位が北で東にやや振れる。石組溝の西方には総柱建物を中心とした建物群がある。SD900の西約1.5mにSB1500とSB1510が西側柱列をほぼ揃え、約20mの間隔で並ぶ。SB1500は3間×3間の総柱建物で、柱間寸法は東西1.6m・南北2.1mである。柱抜取穴に黄色粘土が入るものがある。方位が北で東に振れる。SB1510は梁行2間の南北棟建物と思われる。桁行は1間分のみの検出で調査区外へのびる。柱間寸法は桁行1.5m・梁行2mである。これらの建物の西11.5～12.5mにはA-2期の総柱建物をこわし、やや北西にずらして総柱建物SB1535・1545をつくる。両者の間隔は約8.5mで南北に並ぶ。SB1535は南北3間、東西は2間分検出したが、調査区外に1間のびて3間になるとと思われる。柱間寸法は東西1.8m・南北2.2m、柱掘形は一辺1～1.5mと大きく、北側からの柱抜取穴

がある。抜取の埋土には焼土が混じる。SB1545は東西3間、南北は2間分だが調査区外にのびて3間になると思われる。柱間寸法は東西1.5m・南北2.1m、柱掘形は一辺0.7～1mで、焼土・礫の入った柱抜取穴がある。

〈B期〉 A期の遺構がすべてこわされ、新たに整地して前代とは全く遺構の配置が異なる時期である。調査区西側に掘立柱建物SB1515・1505、その東に南北塀SA1490、調査区東端に南北塀SA1475がある。SB1515は桁行12間以上・梁行3間の長大な南北棟建物である。柱間寸法は桁行2.3～2.4m・梁行2.1m、南北長は28.2m(12間分)以上になる。柱掘形は一辺1～1.2mである。北で西にやや振れる方位をもつ。この建物の東約2mには布掘りの柱掘形をもつSB1505がある。桁行4間・梁行3間の総柱建物である。布掘りは幅約1m、長さ5.7mの東西方向の溝状で、全体を一段掘り下げた後、柱位置だけさらに約50cm深く掘る。柱間寸法は東西1.5m・南北1.9mで、北側柱・南側柱列はSB1515の柱位置とほぼ揃う。SB1505の東約3m、A期の石組溝SD900のすぐ東には南北塀SA1490がある。調査区内11間分検出。柱間寸法は2.3～2.4m。柱掘形は一辺約0.9mで、黄色粘質土が多く入り、東からの柱抜取穴がある。柱位置はSB1515の柱間のほぼ中央になる。調査区東端にある南北塀SA1475は10間分検出した。柱間寸法は2.1m。北で西にやや振れる。SA1490との間約15.5mは遺構なし。

〈C期〉 B期の遺構はすべてこわされる。南北溝2条がある。SD1347は石組溝SD900のすぐ東の南北溝で、南から続く南北道路の西側溝SD640が第8次調査区で折れ曲り、約14mほど西に流路を変えたものである。当初は幅2.5mの素掘り溝であるが(SD1347A)、後に西側に50cm大の石を雑に並べて護岸する(SD1347B)。溝内堆積土の砂層中からは多量の土器類が出土。調査区東端近くにある南北素掘り溝SD1476は幅0.7～1.2mで、西半が1段深くなる。深さ約30～40cm。方位が北で西にやや振れる。

〈D期〉 掘立柱建物SB1478・1491、井戸SE1481がある。SB1478は桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行1.9m・梁行2.1m、柱掘形は一辺40～70cmである。方位が北で西にやや振れる。SB1491は南側柱3間を検出した。柱間寸法は1.8m。南北溝SD1476と重複し、これより新しい井戸SE1481は、

径約 2 m の円形掘形の中央南寄りに石組の井戸枠がある。石組は最下段が残るのみである。最下段は 20～30 cm 大の石を内法一辺約 70 cm の方形に据えている。上部石積は序々に円形となるのであろう。底面は小礫を敷く。検出面からの深さは 1.05 m である。廃絶時の埋土から墨書土器出土。

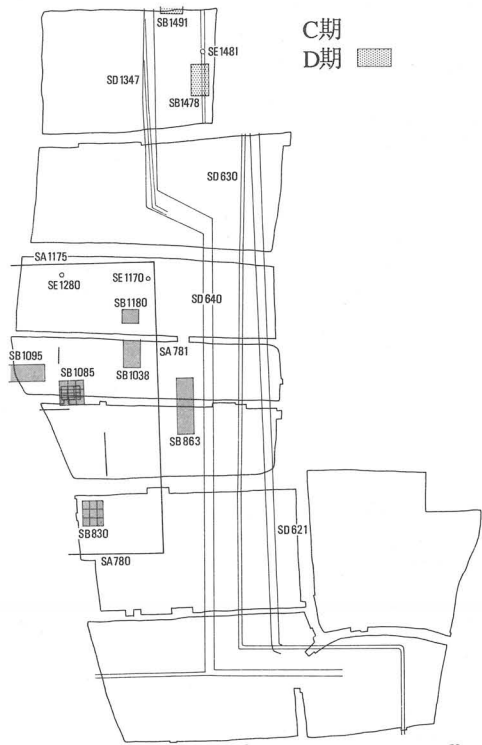
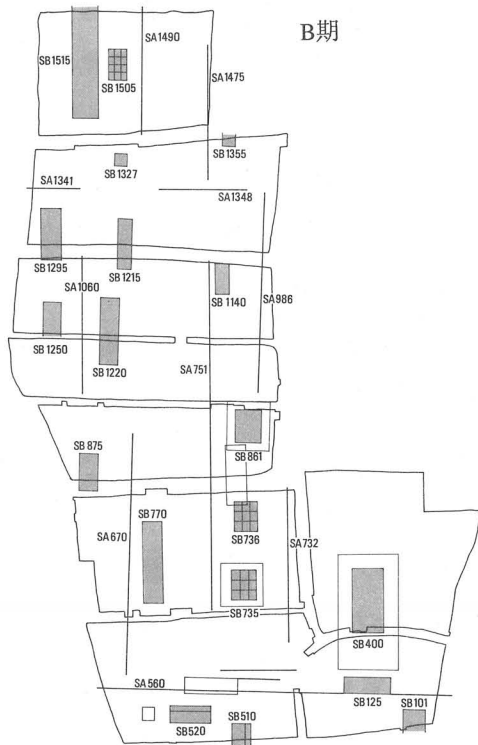
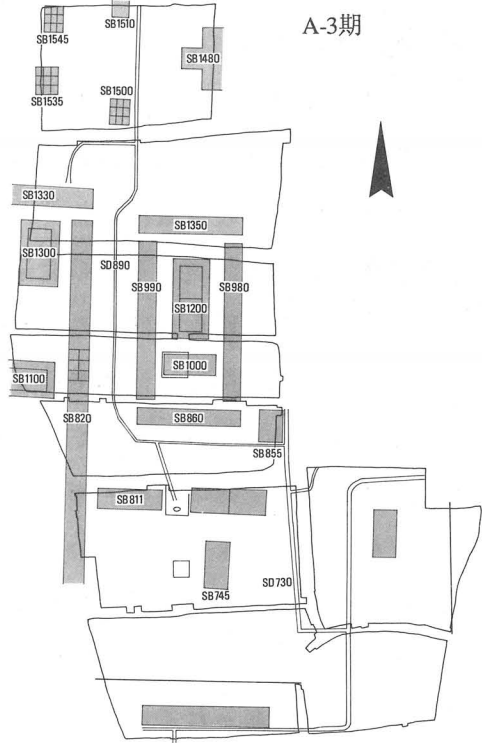
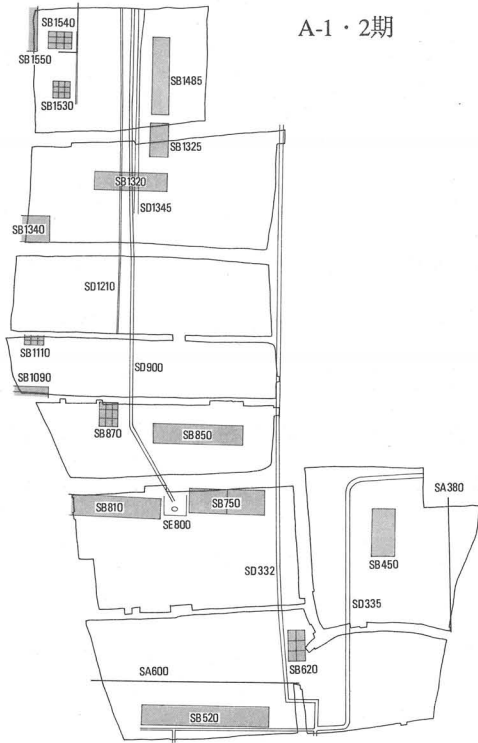
出土遺物

多量の土器類の他、瓦、金属製品、木製品、石製品などがある。土器類では、南北溝 SD1347、土坑、整地土などから 7 世紀前半から 8 世紀前半の土師器・須恵器が出土した。他に縄文土器・弥生土器・瓦器などが少量ある。土製品には、土馬・硯・フイゴ羽口などがある。墨書土器は SE1481 から 2 点出土した。1 点は土師器皿口縁部外面に「上」、もう 1 点は土師器甕体部外面に「来田□司」と記す。瓦の出土量はごくわずかである。金属製品では鉄製の釘・鏃・刀子・斧・紡錘車・鎌・カスガイなどがあるが、これまでの調査区と比べると全体の量は少ない。木製品では A-2 期の整地以前の、木屑を多く含む砂質土中から齋串が出土。石製品には砥石の他、管玉・勾玉・石鏃・石刀・石包丁などがあり、縄文時代から古墳時代にかけてのものが多い。

まとめ

前回の調査では、各時期の主要遺構がまとまりをみせた。特に A-3 期では、長大な建物で形成する狭長な東区画と長廊状建物で囲む西区画の両者について、その北を画する建物を検出した。こうした状況から、今回の遺構のあり方が注目された。その結果、石神遺跡の北を限る施設は検出されず、各時期ともに遺構がさらに北に続くことが明らかとなった。以下、今回の調査成果をこれまでの調査結果と総合して簡単にまとめておく。

<A-1・2 期> 飛鳥寺・水落遺跡との間を区画する東西大垣の北は約 40 m の空闲地をもって、石敷を伴う井戸とその周囲に建物群がつくられ、井戸から発する石組溝が北へのびる。今回の調査では、A-1・2 期の建物・塀を検出し、特に A-2 期について、北方にまとまった建物群があることが明らかとなった。第 8 次調査で検出した東西棟 SB1320 と逆 L 字状に 2 棟の南北棟建物が東側柱列を揃えて建ち、西南には東西棟 SB1340 がある。西北方には総柱建物 2



石神遺跡主要遺構變遷図

棟が南北に東側柱列を揃えて並ぶ。総柱建物は、その規模からみて倉庫と思われる。井戸周辺の建物群は東西棟中心だが、西北の位置に今回と同規模の総柱建物があり、両者とも同様の建物群構成とみられる。

〈A-3期〉 最も遺構が整い、大きく東西2区画に分れる時期である。前回の調査区で東西区画ともその北辺の建物を検出した。これにより、東区画は井戸の北に長大な建物で囲む外周東西24.7m・南北49.4mの狭長な空間がつくられる。西区画は長廊状建物で囲まれた状況が明らかとなった。今回、東区画の北方では約30mの間をおいて、特異な平面形をなす建物の存在が明らかとなった。残念ながら全体の規模・形状は明らかではないが、石神遺跡の特殊な建物配置をもつ空間がさらに北へのびていることが想定される。一方、西区画の北方には総柱建物を中心とした建物が並んでおり、倉庫群があったことが判った。A-2期にもこの一画は倉庫が建っているが、A-3期には東西両区画の倉庫群がこの位置にあったことになる。

〈B期〉 南面大垣はやや南にずらして建てかえられるが、A期の建物群はすべて取りこわされ、南北塀によって区切られる空間に総柱建物・南北棟建物が配置される。A期とは全く異なった遺構の状況であり、遺跡の性格が変わったことがうかがわれる。今回も南北塀と南北棟建物を検出し、これまでと同様の状況がさらに北に続くこととなった。ただ、今回検出した南北棟建物は桁行12間以上という大型建物であり、この時期の中心的な建物の一つと思われる。

〈C期〉 B期の遺構はすべてこわされる。東側に南北道路が通り、その西の掘立柱塀で囲む大きな区画の中に建物・井戸などが点在する。前回調査区から遺構は希薄となってきており、今回も西側には遺構は検出されなかった。

〈D期〉 今回の調査では、新たに奈良時代初期の遺構を検出した。石組の井戸SE1481とその周辺に小規模な建物がある。井戸からは墨書土器も出土しており、奈良時代の遺構がこのあたりから北方に存在することをうかがわせる。

以上のように南面大垣から北へ約160mまで調査が進んできたが、各時期とも遺構がさらに北へ延びることとなった。こうしたことから、遺跡の性格・機能の解明にむけて、今後の調査の進展が大いに期待される。

3 坂田寺第6次調査

(1990年5月～8月)

はじめに

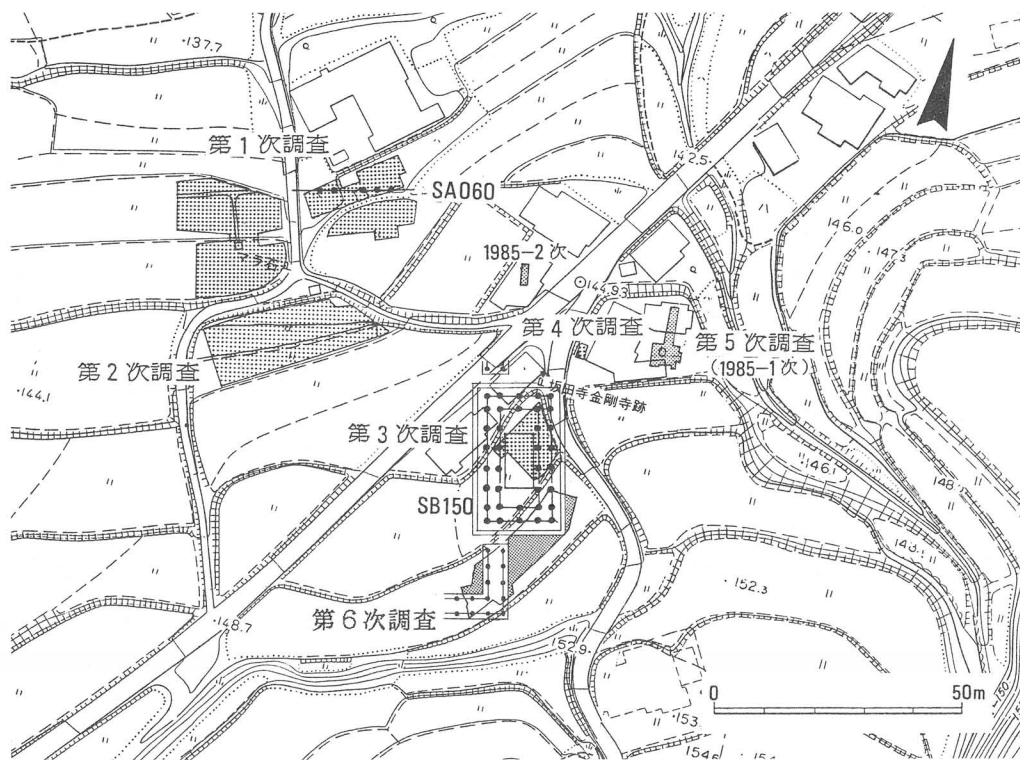
この調査は奈良県の史跡整備に伴う広場・園路工事のための事前調査として、高市郡明日香村大字阪田字古宮で行ったものである。

当調査部は、坂田寺周辺において、1972年以降5回の調査を行ってきた。今のところ、文献に記された6世紀代に遡るような遺構は見つかっていない。マラ石周辺で行った第1次(1972年)・第2次(1974年)調査では7～11世紀の遺構が発見された。7世紀前半代には池、7世紀後半代には溝・土坑などがあり、鞍作止利が寺を整備した頃のものの可能性がある。7世紀代を通じて、マラ石周辺には寺の主要伽藍は存在しない。8世紀代に入ると、井戸・石組溝・石敷・掘立柱塀などが作られ、9世紀になると、井戸が作り替えられる。8・9世紀にはマラ石周辺には、寺の主要伽藍からはずれた厨のような附属施設があった可能性が高い。マラ石の南側では、8世紀に大規模な整地土盛をして東西方向に続く段を設け、そこに石垣(高さ約2.5m)を築いており、伽藍の中枢部に近いことが想定された。「坂田寺金剛寺跡」の石碑の南側で行った第3次調査(1980年)では、8世紀後半に造営された西面する仏堂(SB150)が発見された。この建物は伽藍の中心建物の一つとみられ、基壇中央に須弥壇が築かれ、鎮壇具が埋納されていた。第4次調査(1982年)では、SB150の東北方でSB150と同じ方位の石組溝が発見され、玉石積基壇の一部と想定された。第5次調査(1985年)では、第4次調査区の東方で基壇土の一部と鎮壇具を埋納した土坑が見つかり、SB150と相前後して造営された基壇建物の存在が明かとなっている。

今回の調査地は第3次調査を行った水田の南側で、仏堂SB150の西南隅部にあたり、調査区南半には回廊等の存在が想定された。調査の結果、仏堂の規模・構造が確定したほか、その廃絶時の状況について新知見が得られた。回廊も想定通り検出でき、仏堂に取り付くことが判明した。また、仏堂の建築部材・壁、回廊の建築部材が比較的良好な状態で残っていた。

遺 構

調査地の層序は、調査区の南四分の三と北四分の一で異なる。南四分の三では現地表下2mで花崗岩岩盤の平坦面に達する。この平坦面は、寺院造営以前に存在した南東から北西に延びる尾根を削って作られており、それを掘り込んだり上に築土を積んだりして、奈良時代の回廊SC170・180（後述）が営まれている。その上から順に、灰褐色砂質土（10～15cm）、檜皮や有機質を多量に含んだ黒色砂質土（5～10cm）、暗灰色系砂質土（40～50cm）、褐色系砂質土（70～80cm）、床土（35～45cm）、耕土（30cm）が堆積する。灰褐色砂質土はSC170・180が存続していた時期に回廊の南西側の山手から流れ込んだ土、黒色砂質土は回廊倒壊時の堆積物、暗灰色系砂質土・褐色系砂質土もやはり山手から流れ込んだ土である。調査区の北四分の一では、仏堂SB150（後述）南面基壇の東端付近から地山が東北に向かって下がり、寺院造営以前には東南から西北に流れる谷が形成されていた。谷の自然堆積層には7世紀前半の瓦が含まれ、その上面は調



坂田寺調査位置図（1：1500）

査区東壁で現地表下3.4mである。SB150は、谷部では自然堆積層上に厚く基壇土を積み、尾根部では平坦面を削り出しその上に薄く基壇土を積んで作られている。SB150が存続していた時期に、南西側から多量の礫・瓦を含んだ土砂が押し寄せ、雨落溝を埋め尽くし、壁の破れ目から堂内に流れ込むに至った。土砂の上面は調査区東端で現地表下1.3m、西端では2.1mである。その後SB150が倒壊し、その上を厚く砂層が覆った。

検出した主要な遺構は仏堂SB150、回廊SC170・180などである。

仏堂SB150 長軸方向が北で西に約15°振れる南北棟で、西を正面とする。桁行5間・梁行2間の身舎の四面に庇がつく礎石建ちの基壇建物である。今調査では、基壇、建物東南隅部の礎石4個・柱・地覆・壁土、南雨落溝SD176A・B、東雨落溝SD177、基壇上の閼伽棚の礎石SX179を検出した。

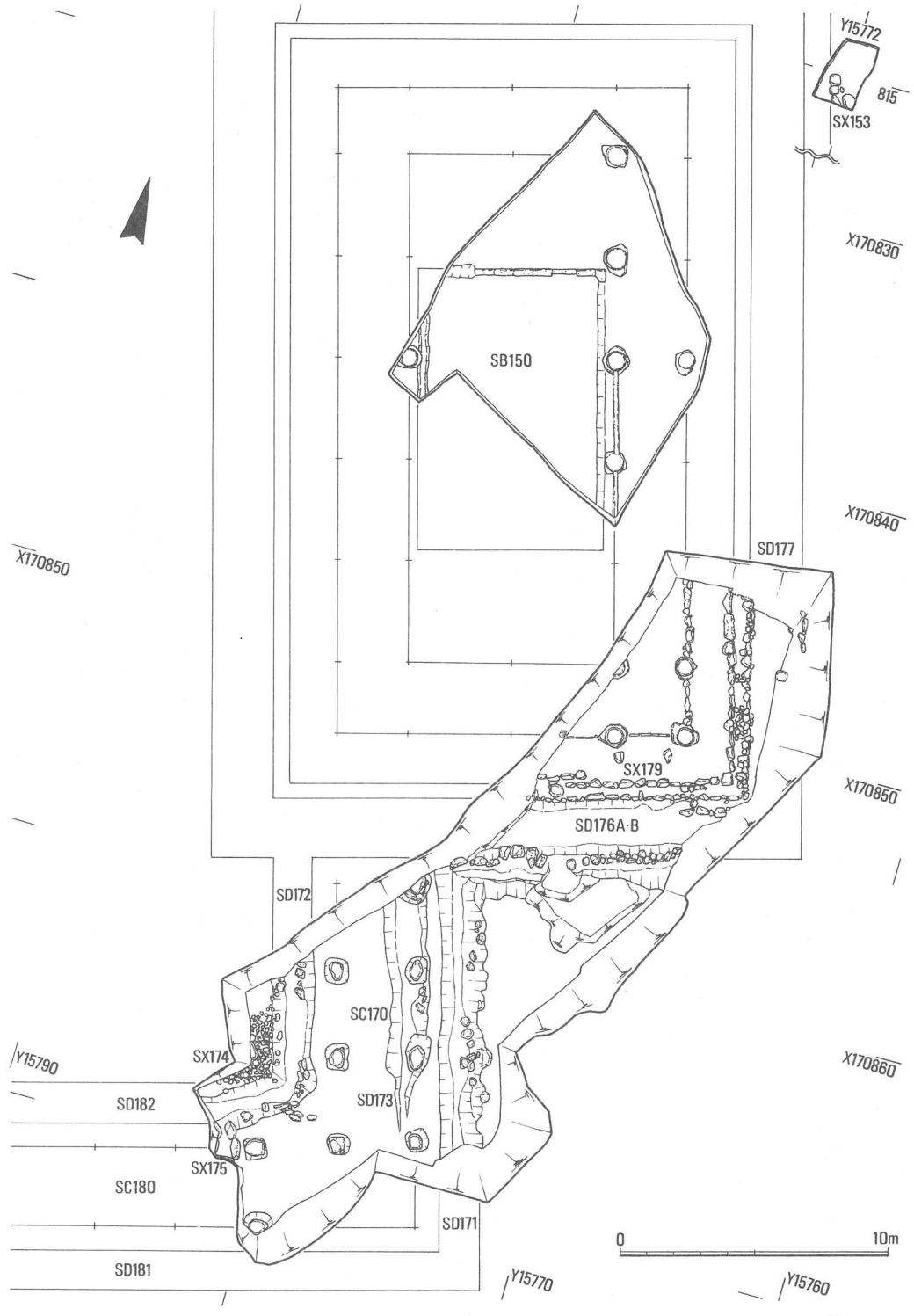
基壇の築成は、旧地形の尾根部分に基壇の南縁と西縁を区画する溝（幅3.5m・深さ1m）を穿ち、基壇本体を尾根から切り離し、その上面を一段削り下げ平坦面を作ってから、基壇に含まれる尾根部分ではその上に薄く版築し、谷部では自然堆積層の上に厚く版築することによってなされたと考えられる。基壇上面は基壇南側の尾根部分より約40cm低くなっている。版築土は厚いところでは8層積み、7世紀後半の瓦が出土した。

基壇は二重基壇で、下成基壇の規模が29.5m（100尺）×17.9m（61尺）、高さ0.6m、礎石心からの基壇の出が2.4m（8尺）、上成基壇が28.3m（95尺）×16.7m（56尺）、高さ0.4m、基壇の出が1.8m（6尺）である。基壇総高は1mであるが、これは雨落溝の底からの高さであり、基壇の上面と基壇の南外・西外との高さの差はほとんど無い。基壇化粧は上成・下成ともに方形の花崗岩自然石（一辺50cm前後）を一段並べるのを基本とし、東面の下成のみ方形の石の上に小さい石を積んで二段とする。下成基壇の上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。上成基壇上面は黄褐色の粘質土で堅く固められており土間床であったらしい。基壇縁石は厚さ10cmほどの裏込め土に貼り付けるように据えられている。南面では上成基壇縁石が二重になったところが一部あり、改修を受けていると思われる。二重基壇の例には飛鳥寺東・西金堂、法隆寺金堂・塔、檜前寺金堂

など7世紀代の例があり、いずれも下成基壇が低く上成基壇が高い点が共通するのに対し、SB150の基壇は下成基壇が高い点が珍しい。

建物の柱間寸法は身舎が3.86m（13尺）等間、底の出が2.68m（9尺）であり、桁行総長24.7m（83尺）、梁行全長13.1m（44尺）となる。礎石は径2m前後、深さ0.7m前後の据え付け掘形の中に置かれ、礎石と穴の隙間には多量の礫が詰め込まれている。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出したもので、柱座径は62～68cmである。礎石3個の上には腐蝕した柱の根元部分が残し、柱の径は約55cmである。基壇上に堆積した砂層中から倒れた柱の可能性のある腐蝕した材を5点検出した。調査区西壁で南妻の地覆の上方には、倒れた柱の腐蝕した端部が見えている。側柱・妻柱の礎石間には、検出したすべての柱間について壁受けの地覆材と壁の根元部分が残っていた。地覆材は、礎石据え付け掘形を埋め戻した後に礎石と礎石をつなぐように掘られた据え付け掘形（幅30cm・深さ30cm）の中に、自然石（幅20～30cm・長さ25～60cm）や方形磚（一辺30～40cm）・平瓦を並べた上に置かれている。地覆材は現状では上に乗る壁の重さでつぶれているが、一辺20cm前後の角材と復原できる。壁は厚さ15cmで木製の木舞を壁下地とし、それに黄灰色の壁土をつけて、表面には白土の仕上げを施している。東壁の南から2間目には柱間を三等分するように配された腰壁束の痕跡が残っていた。束は一辺16cmの角材である。基壇上および周辺から8世紀後半代の軒瓦がまったく出土しないことから、檜皮葺の可能性が大きい。なお、南妻東から1間目の壁の外側に閼伽棚の礎石SX179がある。これは長さ40cmの石2個を壁から75cm離して1.8m間隔に並べたものである。

今回の調査でSB150の周囲の状況が判明した。当初、SB150の南面には幅3.5m・深さ1mの素掘り雨落溝SD176Aが設けられ回廊はなかった。この溝は、SB150基壇の築成時に基壇本体を尾根から切り離すために設けられた溝がそのまま雨落溝に転用されたものである。後に回廊SC170の建設に際し溝の南岸が石で護岸された（SD176B）。護岸を行う以前にSD176Aの底には厚さ30cmほど砂が堆積しており、護岸はこの砂層の上に径20～60cmの自然石を一段並べ裏込め土で固定することによって行われている。現状では石の並び方は雑で面は揃っていない。



坂田寺第3・4・6次調査遺構配置図（1：250）

ない。護岸石列からSB150下成基壇までの距離は2 mである。SB150の東面には雨落溝SD177がある。東岸の護岸石列を長さ1.7mにわたって検出した。石列は長さ30～50cmの自然石を西に面を揃えて立て並べた物で、SB150下成基壇までの距離がSD176Bと同じ2 mであるため、石列はSD176Bに対応する時期の物と考えられるが、SD176Aに対応する溝の存否は調査区外のため不明である。この石列と第4次調査区の石敷遺構SX153との関係について触れておく。石列をまっすぐ北方へ延長すると、その西面はSX153中段石列の約1 m西にくる。またSD177東岸石列とSX153下段石敷とは上面の標高がほぼ一致する。したがってSX153が3段の石積基壇とすれば、その下段にSD177東岸石列がつながる可能性がある。

SB150の廃絶時の状況については、第3次調査では焼失したものと考えられたが、今回新たな知見を得た。すなわち10世紀後半以前に建物の東南方から押し寄せた土砂で壁の根元まで埋まり、次第に立ち腐れの状況になり、建物内部にも壁際には土砂が流れ込んでいた。その後壁が倒れた。壁は東側柱筋ではおもに東へ倒れ、南妻柱筋ではおもに北へ倒れたとみられるが必ずしも一定していない。その直後、基壇・倒れた壁・流れ込んだ土砂の上面で仏像・部材などを焼却し焼土層が形成された。第3次調査で検出された基壇・須弥壇直上の焼土層はこれにあたる。焼土に含まれる土師器からみて、廃材焼却は10世紀後半に行われたとみられる。その後、焼土層上には瓦を多く含む粘土層が薄く堆積し、その上を瓦・礫を多く含んだ砂層が厚く覆った。

回廊SC170・180 礎石建ちの基壇建物で、SB150と主軸方向を揃えた南北回廊SC170と雨落溝SD171・172、それと直交する東西回廊SC180と雨落溝SD182を検出した。SC170・180はともに梁行1間の単廊である。

すでに述べたように回廊の建設はSB150より遅れる。回廊基壇の築成は、SB150の南側に一段高く残っていた尾根上に、南北回廊の東雨落溝と東西回廊の南雨落溝の予定位置で溝を掘り、溝の北西側を一段削り下げ平坦面を作ってから回廊内側の雨落溝を掘り、基壇上に5～10cmの厚さで基壇土を積んで行われたと考えられる。基壇上面はSB150基壇より約5～20cm高く、基壇東側の尾根

部分より約20～40cm低くなっている。

南北回廊SC170は、西柱列をSB150の西側柱列と揃えているが、SB150に直接には取り付かない可能性が大きい。なぜならSD176Bの南岸石列がSC170の基壇部分にも及んでおり、SB150とSC170とがSD176Bで分断されていたとみられるからである。この場合SC170の桁行は4間となる。柱間寸法は桁行3.3m（11尺）等間、梁行3m（10尺）である。SB150とSC170の間には橋が架けられていたと推定されるが、その当否は今後の調査で確認したい。SD176BがSC170基壇と重複する部分の南岸石列の裏込め土から平城Ⅱの土師器が出土した。SC170の礎石据え付け掘形の1個がこの裏込め土を切っているため、SD176Aの時期にはSC170が無かったことが判る。SC170の基壇は化粧をしておらず、幅は東西両雨落溝の心々距離で約6.2m、溝肩間の距離で約4.7～4.9mである。基壇の出は礎石心から雨落溝肩までの距離で0.8～1mである。礎石は花崗岩の自然石で径60～100cmである。礎石は地山を浅く掘りくぼめて据え付けられ、その後地山上に薄く基壇土が積まれている。後述するように礎石付近には柱が倒れており、SC170の柱3本は東へ、SC180の柱2本は北へ倒れていた。東礎石列に重複して溝SD173がある。これは最大幅1.6m、深さ約10cmの浅い溝で、地覆の抜取り痕跡の可能性がある。東雨落溝SD171は、幅1.5m、基壇上面からの深さ約30cm、基壇東側の尾根部分からの深さ約50～70cmである。東壁面に人頭大の礫が散在している。現状では礫のほとんどが浮いているが、壁面に不整形の小穴が多数あり、そこに礫を据えて護岸していた可能性がある。最下層から平城Ⅲの土師器が出土した。西雨落溝SD172は、幅約1.6m、基壇上面からの深さ約30cm、基壇西側の礫敷舗装SX174からの深さ約40cmである。東西両壁面にSD171と同様に礫が散在し小穴もあることから、礫で護岸していた可能性がある。

東西回廊SC180の柱間寸法は桁行・梁行ともに3m（10尺）である。調査区西端の礎石の西側に石組施設SX175がある。これは長さ60～80cm、幅50～60cm、厚さ30～40cmの自然石5個を北に開いたコの字形に組んだもので、石を側壁に2個、奥壁に1個並べ、底石はなく天井も開放されている。いかなる機能を果たしたのか不明である。北雨落溝SD182は、幅約1.6m、深さ約40cmである。や

はり礫で護岸していた可能性がある。

基壇上および雨落溝内からは、連子窓など回廊の建築部材が多数出土した。部材については次項で触れる。連子窓および東拡張区の礎石の周囲から檜皮が相当量出土した。この事および丸・平瓦の出土が少なく、軒瓦が皆無であることからみて回廊は檜皮葺と考えられる。

回廊の内側には拳大の礫を敷きつめて舗装しているが、この舗装面SX174と回廊上面とは殆ど同じ高さである。

遺 物

主要な出土遺物は、建築部材、瓦埴類、埴仏、土器・陶器類、金属製品、木心乾漆仏などである。

建築部材 SB150、SC170・180にともなうもので、種別が判明するのは、連子窓（連子子・框）・地覆・柱・頭貫・大斗・巻斗・墓股などである。地点別では、SB150で柱・地覆、SC170・180基壇上で連子窓・柱、SD171で柱、SD182で柱・頭貫・大斗・巻斗・墓股が出土した。建物の基壇上およびSD171で検出した物の多くは腐蝕が進行しているが、SD182でまとまって出土した物は比較的残りがよい。

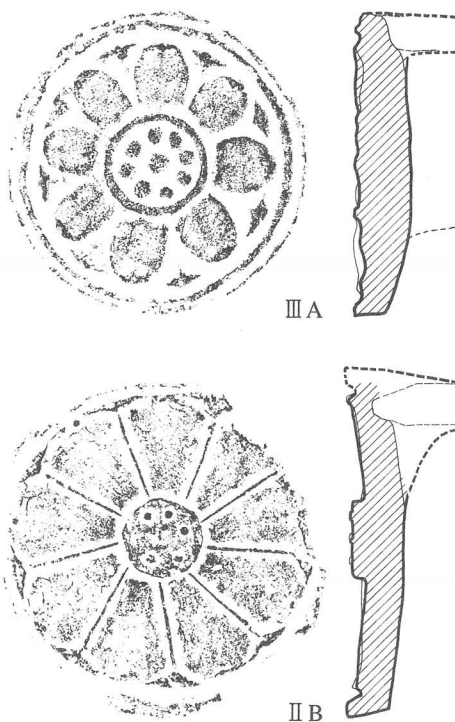
連子窓はSC170の東壁南から4間目のもので、連子子10本と框が残っていた。連子子は14.7cm間隔（心間平均）に並び、現存長84cmで、断面形は菱形（6.5×5.5cm）である。框は連子子に接した西側にあり腐蝕がひどく芯のみが残る。連子子の東側には現存長293cmで断面方形（18.5×9cm）の角材があるが、連子子を受ける枘穴がなく腰長押か腰貫と考えられる。柱は5本が対応する礎石の近くに倒れていた。現存最大長200cmである。SD182に倒れ込んでいた最も残りの良い物でみると、若干のエンタシスが認められ最大径は32cm、頂部には丸太枘（長4.5cm・径5cm）があり、柱頭両側に頭貫を落とし込む仕口がある。頭貫は柱に落とし込んだ状態で検出された。断面長方形（14.2×10.5cm）で、長さは大半が調査区外に出るため不明である。大斗・巻斗には斗尻に円形の穴がある。墓股には下面に方形の枘穴（5.5×3.5cm）があり、形状は平城宮東朝集殿前身建物

(唐招提寺講堂) や法隆寺西院経蔵の奈良時代前半の物に似ている。このほか種別は不明であるが、幅7.3cmの角材の端に長方形の銅板(12.9×7.3cm)を銅釘で打ちつけた物が連子窓の東側で検出された。以上の部材は山田寺の物に比して全体に小振りである。

瓦塼類 多量の丸・平瓦の他に、軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦・熨斗瓦・鷗尾・塼仏がある。軒瓦は35点しかなく、しかも8世紀前半以前ないし平安時代に属し、仏堂や回廊に伴うものではない。

SB150建立以前の谷の自然堆積層から7世紀前半、SB150基壇土から7世紀後半の瓦が出土している。

坂田寺出土の軒丸瓦は、これまでの調査で10型式21種あることが知られているが、今回はこのうち8型式11種が出土した(表参照)。このうち、ⅡB型式とⅢA型式は今回良好な資料が出土したので図示する。軒平瓦は9型式10種が知られており、今回はこのうち3型式4種が出土した(表参照)。垂木先瓦は2型式5種が知られており、このうち1型式3種が出土した(表参照)。熨斗瓦は3点、鷗尾は2種11点が出土した。塼仏はSD176Bの埋土から1点



出土軒丸瓦(1:4)

種別	型式	数	備考	種別	型式	数	備考
軒丸瓦	I A	3	桜花形単弁10弁	軒丸瓦	ⅥA	8	善正寺式
	I D	1	桜花形単弁9弁?		ⅦA	3	複弁8弁
	ⅡB	1	角端点珠単弁9弁		ⅧA	1	複弁6弁
	ⅢA	1	円端反転単弁8弁	総数	30		
	ⅢD	1	円端反転単弁6弁	軒平瓦	I A	2	手彫り忍冬唐草紋
	ⅣA	4	重弁8弁		ⅣA	1	6641 C
ⅣB	1	重弁8弁	ⅣB		1	6641 F?	
ⅤA	6	山田寺式	ⅦA		1	川原寺 762 型式	
				総数	5		

出土した。方形三尊埴仏の右脇侍菩薩の首から下を残す破片であり、同原型品が川原寺・同裏山遺跡・橘寺・山田寺・紀寺・南法華寺で出土している。

土器・陶器類 土師器・須恵器・施釉陶器がある。土師器は、SC170基壇と重複する部分のSD176B南岸石列の裏込め土から平城Ⅱ、SD171最下層から平城Ⅲが出土した。墨書土器は、SD171から土師器皿Aの底部外面中央に「中」と書いた物、SD176Bから平城ⅡかⅢの土師器杯皿Aの底部外面中央に「廣万□」と書いた物が出土した。三彩陶器はSD176BやSD171を埋め尽くした堆積層から出土した。27片あり、うち22片は同一個体（瓶）と思われる。他は鉢2片・椀1片・器種不明体部1片である。灰釉陶器はSD171から椀片1点が出土した。他にSB150基壇上の堆積土からフィゴの羽口が1片出土した。

金属製品 SD171から儀鏡化し内区が独立した海獣葡萄鏡が1点（裏表紙）、SB150基壇上の堆積土から金銅製蝶番が1点出土。このほか鉄釘が12点ある。

木心乾漆仏 仏堂上の焼土層から断片多数が出土した。金箔が貼られており、尊名は不明である。

まとめ

奈良時代の伽藍中枢の建物と考えられるSB150の規模・構造が確定した。SB150はどの建物に比定できるであろうか。須弥壇が身舎の梁間いっぱいにとられていること、桁行が7間あること、基壇が高く軒の出が深いこと、背後（東北側）に別の基壇建物が存在すること、に注目すれば金堂の可能性が強い。ただし、両脇間を除いた正面が等間であること、基壇面が土間床である点から講堂の可能性も捨てきれない。今回の調査で、SB150に回廊が取り付くことが判明したが、これは決め手にならない。この問題については今後の調査の進展を待ちたい。建物の規模は、金堂とすれば興福寺東金堂・陸奥国分寺金堂・上野国分寺金堂、講堂とすれば美濃国分寺講堂などが近い。

SB150の造営年代は、第3次調査で検出した須弥壇の築成に伴う鎮壇具に含まれる銅銭の年代によって、天平神護元年（765）から、延暦15年（796）の間と考えられている。須弥壇が造営当初のものであれば、天平神護元年が上限とな

る。ただし、須弥壇が改修されていれば、上限がさらに遡る可能性が出て来る。その決定は今後の調査を待たねばならないが、今回基壇版築土から7世紀後半の瓦が出土したので、7世紀前半まで遡らないことは確定した。SB150は第3次調査では焼失したと考えていたが、立ち腐れで倒壊したことが判明した。なお、SB150・回廊ともに檜皮葺の可能性はある。奈良時代の檜皮葺寺院の例には石山院などがある。

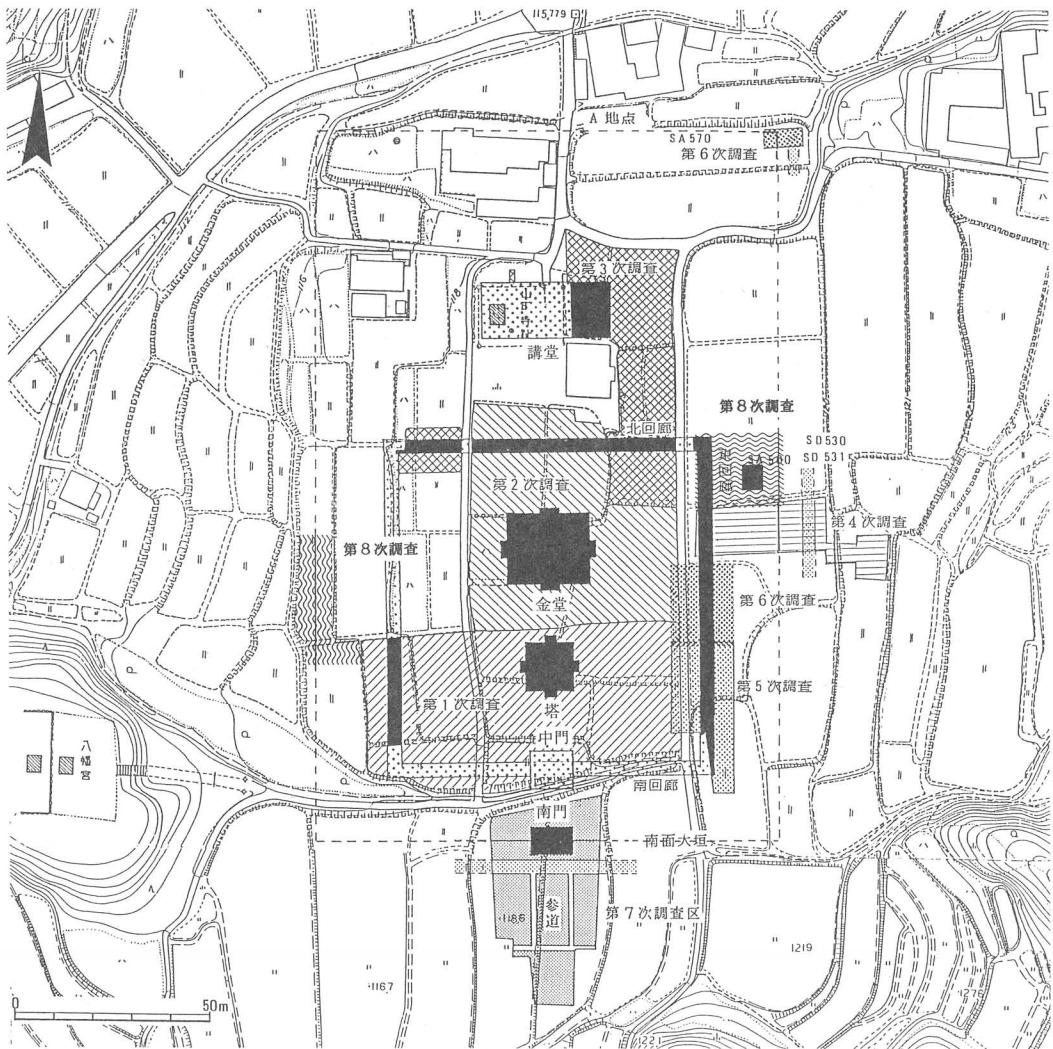
回廊の存在が判明し、位置・規模・構造についての手がかりが得られ、その建設がSB150より遅れることが判明した。回廊の上限年代は奈良時代前半（平城Ⅱ）である。西面するSB150の西側には回廊に囲まれた一郭が存在し、SB150の両脇に南北回廊が取り付いていたと見られる。SB150の南側ではSC170との間に橋が架けられていた可能性がある。SB150の北側では、第2次調査成果と合わせると、南側よりも南北回廊が短かった可能性が大きい。なぜなら、SC170は長さ約18mであるが、SB150の北側でも18mとすると、第2次調査で検出した8世紀代の高い石垣の北側に出てしまう。この石垣の南側にはかねてより回廊の存在が予想されていたのである。石垣上は後世の削平を受けており、回廊の遺構は検出されていないが、石垣のすぐ南側に北面回廊を想定すると、回廊で囲まれた区画の南北長は約58m（195尺）となり、海龍王寺・甲賀寺程度の規模となる。

今回、伽藍配置についての重要な知見を加えることにより、8世紀後半の坂田寺の様相がいっそう明らかになった。規模は平城京の大寺と比べれば小振りなもの、地方の国分寺クラスであり、立派なものと言えよう。この時期の坂田寺がこれほどの大規模な造営を行えたのは、天平勝宝元年（749）に東大寺大仏殿の東脇侍を寄進した尼信勝など有力な尼僧や後援者の存在を背景に考えるべきであろう。

4 山田寺第8次調査

(1990年8月～12月)

当調査部では昭和51年以来7次にわたって山田寺の塔・金堂・回廊・講堂・南門等伽藍主要部の調査を行ってきた。その結果金堂が特異な柱配置をもつ建物であること、回廊が倒壊した状態で検出され、飛鳥時代の建築様式を知る貴重な資料を提供したこと等、多大な成果をあげてきた。今回はこれまで未確認の寺域西限と回廊の東北隅の2ヶ所に調査区を設け、寺域西限の施設・西門の



山田寺調査位置図

有無・東回廊と北回廊取り付き部の状況・回廊東側の区画その他の施設の状況を解明するために調査を行った。

東調査区は第4次調査区の北に続く平坦な旧水田で、東西25m・南北21mの調査区を設定し、面積は522㎡、西調査区は金堂のほぼ真西で一筆毎に急激に西に向って低くなる地形の所に東西8m・南北32mの調査区を設定し、面積は278㎡である。

東調査区の遺構

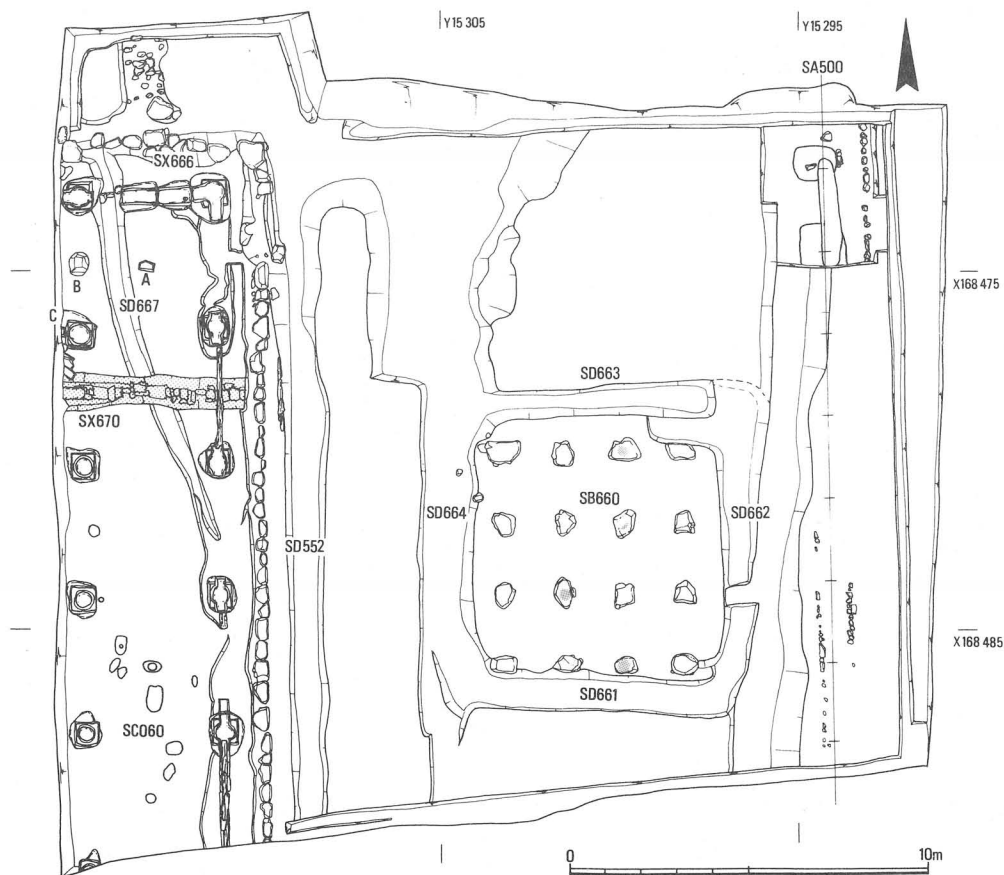
東調査区の基本層序は耕土・床土・灰褐色砂質土・灰褐色粗砂・黒灰色粘土（地山直上では暗黒灰色、東半部では青白色粘土）・地山（白色粘土）である。検出した主な遺構は、東回廊SC060・東回廊扉口SX666、回廊東雨落溝SD552、暗渠SX670、宝蔵SB660、宝蔵雨落溝SD661～664、南北塀SA500、基壇状高まりSX535等がある。
東回廊SC060 東回廊の基壇面上には灰褐色粗砂・灰色細砂が30～40cm積り、特に灰褐色粗砂中には瓦が大量に含まれていた。回廊廃絶後、回廊の東南方向から東側柱の北から3間目を抜けて基壇上を北方へ流れる流路SD667があり、これによって大量の砂がもたらされ、またそのために東回廊北端部では建築部材の残りがよくなかったと考えられる。砂層の下の基壇土直上に暗褐色土が薄くかぶり（最大10cm）この面の上にも瓦が敷かれたような状態で貼り付いていた。ある時期基壇面の化粧に瓦を敷いたのであろうか。

基壇 東回廊については第4・5・6次調査で平面・基壇の構造・建物の構造などが判明している。今回は東調査区の西半で東回廊の北端部5間分を検出した。東回廊は発掘区北端で曲って北回廊に繋がる。回廊の基壇・建物の規模・構造はこれまでの調査の成果と特に異なる点はない。回廊は単廊で、柱間寸法は桁行・梁行共3.8m（高麗尺で10.5尺）、外側（東側）の柱筋のみ壁・連子で閉じている。礎石は花崗岩製で、円形の造り出しがある。東回廊南半部で顕著に見られた蓮華座はわずか2、3個の礎石に認められたのみで、遺存状態は悪い。外側の礎石には地覆座を作り出し、礎石間は榛原石の地覆石（幅25cm、長さ40～50cm）でつなぐ。ただし北から4間分の地覆分は抜き取られている。なお木製地覆は北から2・4・5間目に残っており、5間目の遺存状況が最も良い。

回廊基壇は幅6.4mで、柱心からの基壇の出は1.3m弱である。ただし今回の調査区では西の側石は一部で東側の面を確認したに留まり完全には西の基壇縁までは検出していない。基壇縁には長さ40~70cm、高さ30cm程度の花崗岩または安山岩の自然石を一段並べて縁石としている。縁石の裏側の幅25cmに縁石据え付けのための裏込土を入れているが、この中には瓦がかなり混っており、縁石はある時期据え変えられている可能性がある。なお東側北端間と北側の側石は崩壊して倒れているものが多い。

基壇築成は、地山を削り出した上に30cm弱の高さに砂質土を互層に積み上げ、その段階で礎石据え付け掘形を掘り、根石を用いず礎石を据えた後再び基壇を積み上げている。

東回廊・北回廊には、側柱列及び棟通りの柱間のほぼ中央に柱掘形があるこ



山田寺東調査区遺構配置図

とが従前の調査で知られている (SX062・064・066)。今回の調査ではこの掘形は検出できなかったが、北端の間で2ヶ所(棟通りの隅Aと北回廊の東から一間目の柱筋の棟通りB) 小さい礎石を検出した。位置的には上記の掘形と対応すると思われる。礎石はAが榛原石の切石、Bが安山岩である。前者は地覆石と同じ寸法であるから地覆石として用意した石を転用したか、一旦据え付けた地覆石を抜き取って転用したかいずれかの可能性がある。また入隅の礎石の西に接してAと同様の切石Cが礎石をつなぐように置かれて居る。これは北回廊の東から5間目でも検出されており、回廊内側の地覆石になるものである。これらA・B・Cの3個の礎石は一連のものと考えられる。北回廊の内側柱に部分的にせよ地覆石の並んでいること、棟通りにも礎石のある(A)ことから考えると、少なくとも北回廊は内側も壁などで閉じられていて、東回廊では床が張られていた時期があったとも考えられる。そして東回廊側柱列及び北回廊の側柱列と棟通りの柱間の中央にある柱穴も、位置関係からすればこれ(A)と一連で床を張るための根太受けの礎石と見ることができる。ただし従来調査の所見ではSX062・064・066は基壇築成後で外側の柱列の地覆石を抜き取る以前に掘られたとされている。地覆石のある状態でその下に穴を掘ることはできないから、地覆石を据える前にこの穴が掘られたこととなり、その場合床張りの時期が古くなりすぎてしまう。柱穴と今回検出の小礎石とは時期が異なるのであろうか。

扉口SX666 北回廊の東端間には通常より大きい(幅40cm、長さ1m)地覆石3個を並べており(但し1個は後世の流路に当てており、抜かれている)、その内の東端のものには扉の軸摺穴(径9cm、深さ4cm以上)が穿たれており、回廊の背面側に向けて出入口が開くことになる。扉は内開きである。軸摺穴には鉄板が置かれていたが錆び付いて取り出す事はできなかった。西側の軸摺穴の位置は当該地覆石が抜き取られているため正確にはおさえられないが、柱との位置関係が東側と同じと仮定すれば東西の軸摺穴間心心が2.2mとなり、東回廊の北から12間目で確認されている扉口と比較すると、約20cm広いことになる。また12間目の扉口の地覆石の地覆座は礎石際は礎石地覆座と同じ幅として方立部分から幅を広げているが、今回検出の扉口では地覆石は礎石際から直ちに幅を広げており、

構造がやや異なる。扉口を出た北側は基壇化粧の崩壊が著しいが、階段が設けられていた形跡はない。

雨落溝SD552 東回廊の基壇縁から50cmの幅をあけて南北溝SD552がある。幅1m、深さ25cmの素掘で、ほぼ東回廊全長に沿って設けられている。但し北端から2間目で浅くなって東肩が不明瞭になり、東北方向への流路となって溢水している。因みに従前の調査の所見通り北回廊には北雨落溝はない(第3次調査、概報10)。溝の埋土は2層に分かれ、下層は青灰色粗砂、上層は黒灰色粘質土である。

暗渠SX760 東回廊の北から2間目に榛原石の板石に瓦を混じえて組んだ暗渠がある。この暗渠は北回廊の南雨落溝の延長部にあたり、東方への排水の施設と考えられる。基壇築成後、幅0.7～1mの掘方を掘り、底に幅30cm、長さ50cm前後、厚さ6cm程度の板石を敷き、その上に高さ約20cm、長さ40cm、厚さ6cmの側石を立て、底石とほぼ同寸法ながらやや不整形の蓋石をのせて、石の隙間等に瓦片を置いて暗渠を構成している。暗渠の内径は幅18cm、深さ20cmとなる。西端の蓋石だけは巨大な軒平瓦を用いており、その西端部の瓦当が東回廊の西側石裏側に接していた。回廊造営当初に作られたものと思われる。

今回の調査区では倒壊した回廊の部材はごく少く、基壇上に地覆が3本、東雨落溝に大斗・肘木・垂木各1個があったに過ぎない。

宝蔵SB660 東回廊の東に約6mの間を置いて方三間に礎石が並ぶ。後述のようにこれは宝蔵の礎石と考えられる。柱間は東西1.7m(5.5尺)、南北2m(6.5尺)の等間で、しかも総柱である。従って南北棟の高床の蔵と見られる。礎石は自然石で多くは上端を平坦にして使っている。この内4個の礎石上面には柱のあたりがあり、柱径は30cmと知られる。四周に雨落溝がめぐって基壇状を呈するが、実際には周囲の地盤面と基壇面の高さの差はほとんどなく、礎石上面で約25cm高いにすぎない。礎石の据え付け方は、白色粘土の地山面上に乳白色粘質土を積みながら礎石を据え付け掘形を掘らずに据える。この際、乳白色粘質土は礎石の回りのみ円形の丘状に積んで盛り上げる。さらにその上に暗青灰色砂質土を積んで基壇を形成するのである。ただ基壇を断ち割った状況から見ると、乳白色粘質土を積む前に地山面を掘りこんで深さ20cm以上の穴が掘られており、

その中には瓦も混じっている。この穴は古い礎石据付け穴で、ある時期に礎石を地上げしている可能性がある。暗青灰色砂質土に含まれる土器からその時期は9世紀末から10世紀初頭と考えられる。蔵の地上げは唐招提寺でも知られる。

雨落溝SD661～664 礎石心から約80cmあけて四周に雨落溝がめぐる。幅は1～1.5m、深さ20cmで、護岸施設はない。柱心から溝心まで、桁行・梁行共約1.5mである。西北隅では北に向って溝が流れ出し、東回廊東雨落溝から東北方向へ流れる流路と合流している。この雨落溝は埋土が上下二層に分かれ、上層は黒灰色粘質土、下層は黒灰色砂質土で、上層は溝の周辺まで広く広がっている。上層の埋土中には大量の木簡・木製品・建築部材、少数の金属製品が含まれており、基壇面にも若干の木簡・木製品・金属製品が落ちていた。建物廃絶時に建物やその内蔵物が周辺に散乱して埋もれたと見られる。これらの遺物には経軸・仏具・経帙の題籤があり、それらがこの建物の収納物と考えられるところから、この建物は経典・仏具などを収納する宝蔵と考えられる。

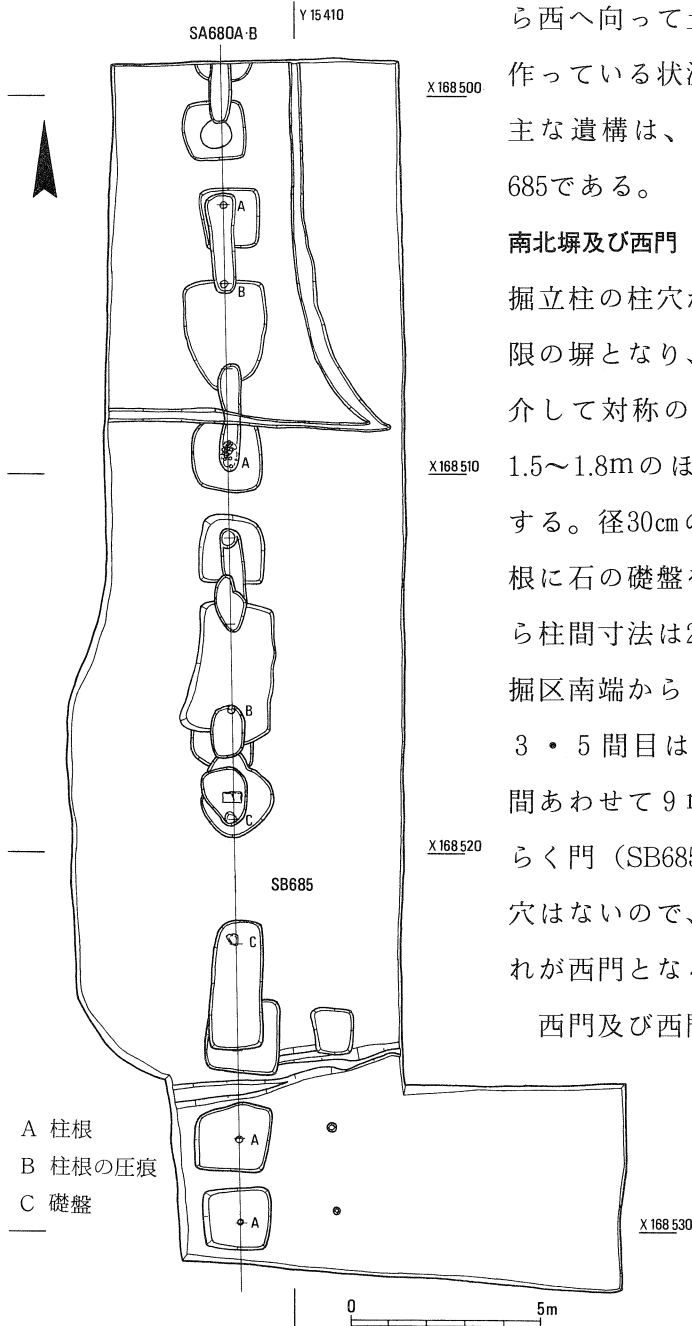
東限の築地・塀SA500 回廊基壇から約14mあけて南北に基壇状の高まりが続く。これは第4次の調査区でも検出されており、基底部幅は約5m、上部で約2mあり、上面に築地基底部と思われる1m間隔で並ぶ瓦列がある。この基壇の西側には瓦敷きの整地面があり、西へ向ってやや傾斜しながら回廊近くまで至る。発掘区北半部では特に瓦敷きが顕著である。

この基壇状の高まりは平安時代後期に築かれているが、それまでにも何度かに互って整地され徐々に高くなっていったものらしく、部分的に石や瓦の並ぶ層がある。

この整地を取ると掘立柱の南北塀SA500が検出される。これも第4次調査で検出されたものの北の延長にあたり、今回は一間分のみを検出している。柱間寸法は4次調査検出分も含めて約2.3mとみなすことができ、柱掘形は一辺1.2m程度である。湧水が著しく明確には解らないものの、後述の西限の塀と同様、2個分の柱を一体にした抜取り穴があり、改修されている可能性がある。

西調査区の遺構

西調査区の基本層序は耕土・床土・黄褐色砂質土の遺構面となる。遺構面は西に向って傾斜しており、深さ1m以上の整地土である。調査区南端では東から西へ向って土を流し込んでほぼ平坦面を作っている状況がよく見られた。検出した主な遺構は、南北塀SA680A・B、西門SB685である。



山田寺西調査区遺構配置図

ら西へ向って土を流し込んでほぼ平坦面を作っている状況がよく見られた。検出した主な遺構は、南北塀SA680A・B、西門SB685である。

南北塀及び西門 発掘区のほぼ中央を南北に掘立柱の柱穴が一行に並ぶ。これが寺域西限の塀となり、東限の塀とは伽藍中軸線を介して対称の位置にある。柱掘形は一辺1.5~1.8mのほぼ方形で、深さは2mに達する。径30cmの柱根が残っているもの、柱根に石の礎盤を置くものがある。これらから柱間寸法は2.25mと知られる。ただし発掘区南端から3~5間目は柱間寸法が広く、3・5間目は2.85m、4間目は3.25m、3間あわせて9mとなる。この3間分はおそらく門(SB685)であろう。ただ控柱の柱穴はないので、3間の棟門と考えられ、これが西門となる。

西門及び西門より北の掘立柱塀は原則として隣あう2本の柱を一体の抜き穴を掘って抜き取っている。その後抜き穴を掘形として再度柱を立てている。柱位置はほとんど変わっていない。こうした建て替

えは南門両脇の掘立柱塀でも行われている。

西門及び西限の掘立柱塀の造営や改修の時期を示す遺物は出土していないが、南面の塀・門の建立・改修等と一連の工事と考えよう。ただ南門両脇の塀は最終的には築地に改修されているが、今回の西限の塀ではその有無を確認することはできなかった。

遺物

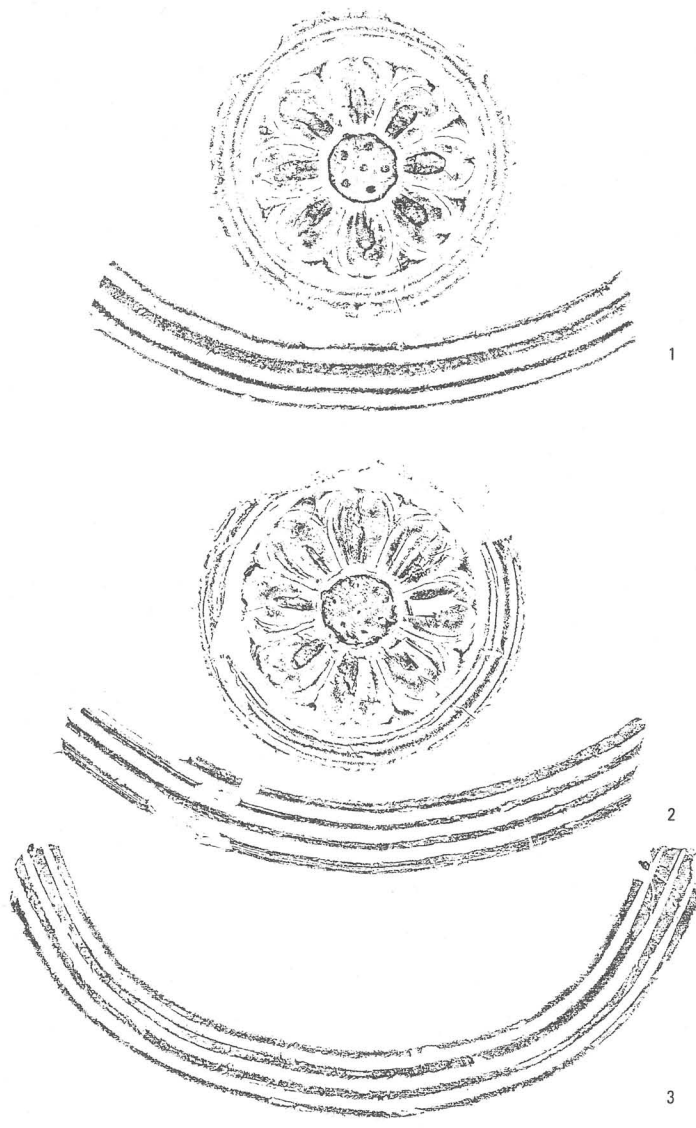
西調査区からは僅かな瓦・土器を除いてほとんど遺物が出土しなかった。東調査区からは、回廊基壇上から多量の瓦が、回廊東雨落溝からは多量の瓦・少数の建築部材・土器が、宝蔵の雨落溝及び基壇面からは大量の木簡・木製品・建築部材・金属製品が出土した。また宝蔵北方の整地土中からも多量の瓦が出土した。

瓦類 丸・平瓦をはじめ多量の瓦類が出土した。その内訳は軒丸瓦145点、軒平瓦292点、垂木先瓦116点、面戸瓦8点、鷗尾5点と丸・平瓦1600袋以上などである。3月末現在の整理による種別出土点数を次表に示した。

軒丸瓦はいずれも単弁8弁蓮華紋の「山田寺式」で、A～Fの6種に分かれるうち、今回はA・C・Dが出土している。軒平瓦はすべて重弧紋で、三重弧5点のほかはすべて四重弧である。軒丸瓦Dと四重弧紋軒平瓦Aの組み合わせ(1)が回廊用と考えられており、その次に多い軒丸瓦Cと四重弧紋軒平瓦Fの組み合わせ(2)が、出土状況からみても宝蔵所用と判断できる。

今まで山田寺において出土した面戸瓦は、丸瓦を焼成後に打ち欠いて作ったものであったが、宝蔵に伴う面戸瓦が成形段階から面戸用に製作してある点が注目される。

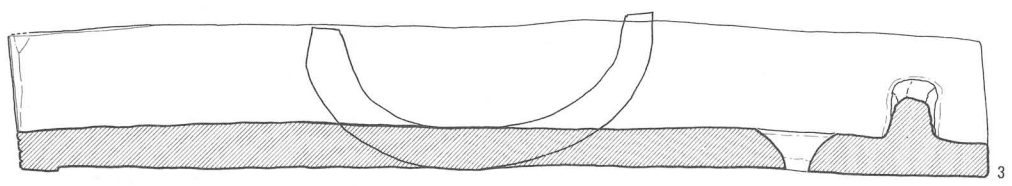
四重弧紋軒平瓦の形をとった長大な瓦が1点ある(3)。東回廊北部の基壇内を通る暗渠の蓋に転用されていたもので、長さ101.5cm、最大幅37cm、端部から7cmの所に高さ4cm、幅4cmの堤を設け、その内側に直径8cmほどの円孔を穿ってある。通常の軒平瓦より、彎曲度が強く、しかも瓦当に向かって右側の方が比較的直に近く立ち上がるので、螭羽に用いた「掛け瓦」と考える向き



山田寺出土軒瓦拓影 (1 : 4)

		点数	百分率	
軒 丸 瓦	A	10	7	
	C	38	26	
	D	70	48	
	不明	27	19	
	合計	145	100	
軒 平 瓦	四 重 弧	A	99	34
		B	30	10
		F	93	32
		不明	65	22
	三重弧	5	2	
	合計	292	100	
垂 木 先 瓦	A	16	14	
	B	10	9	
	C _b	8	7	
	D	64	55	
	不明	18	15	
	合計	116	100	
鴟 尾		5		
面 戸		8		

山田寺出土瓦集計表



大瓦実測図 (1 : 8)

もあるが、その用途についてはまだ検討の余地がある。掛け瓦として製作したものの、あまりにも重すぎるので実用にならなかったとするのも一考であろう。

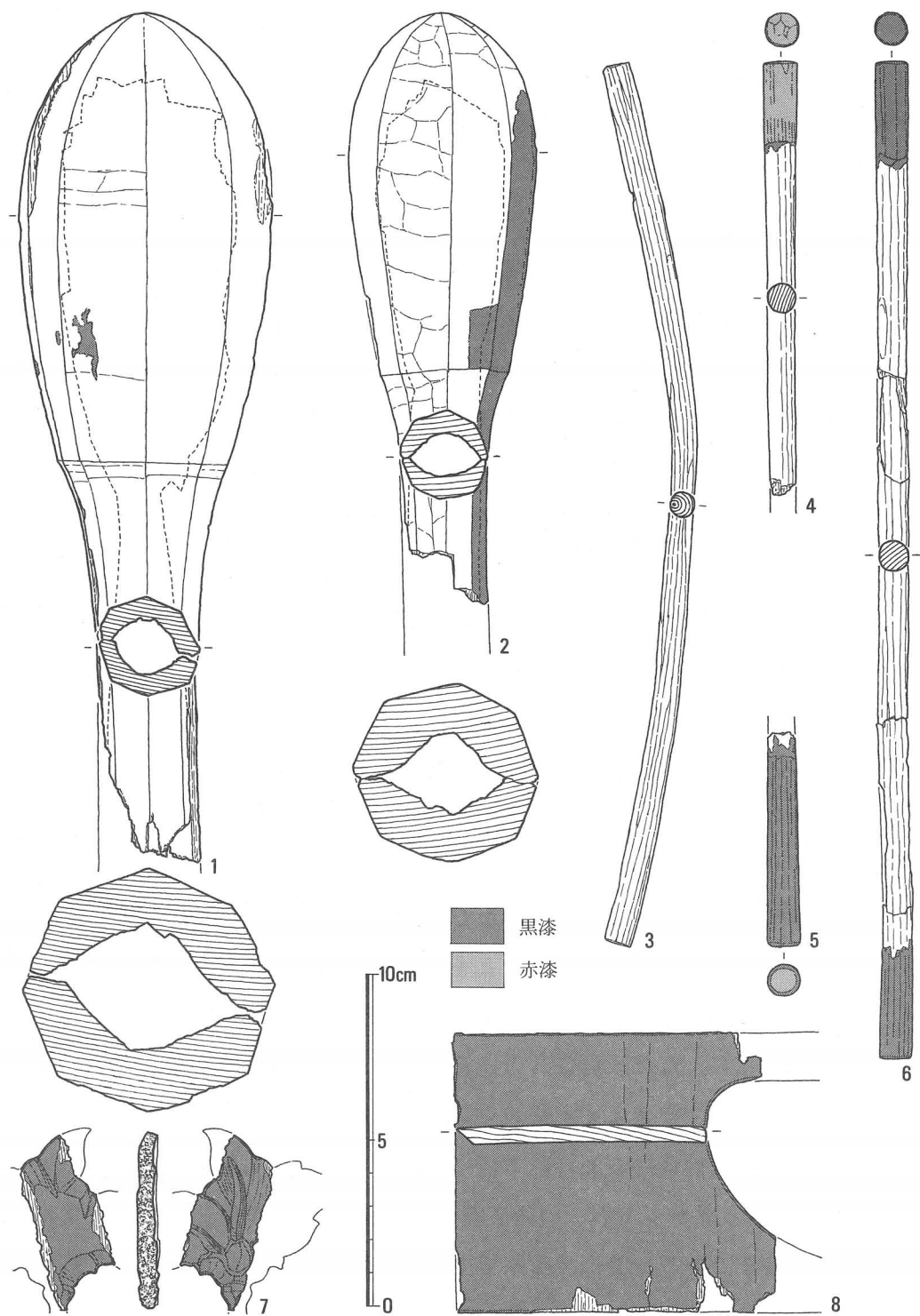
土器 出土土器には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器の他に多量の施釉陶器がある。施釉陶器には二彩の多嘴壺、緑釉の皿・盤、灰釉の壺、白磁の椀がある。土器は大半が平安時代のものである。宝蔵雨落溝からは9～11世紀前半の土器が、基壇土からは9世紀後半の土師器が出土した。また回廊雨落溝出土土器は11世紀前半の土師器皿が最も新しく、瓦器は含まれない。

木器・金属器 出土した木器には、漆塗及び素木の経軸、漆塗函、漆塗の脚、漆塗厨子の扉、漆塗の茄子形仏具、漆塗の宝相華葉形仏具、八角台座、漆塗の華瓶形仏具等がある。台の足には奈良時代のもので平安時代のものである。

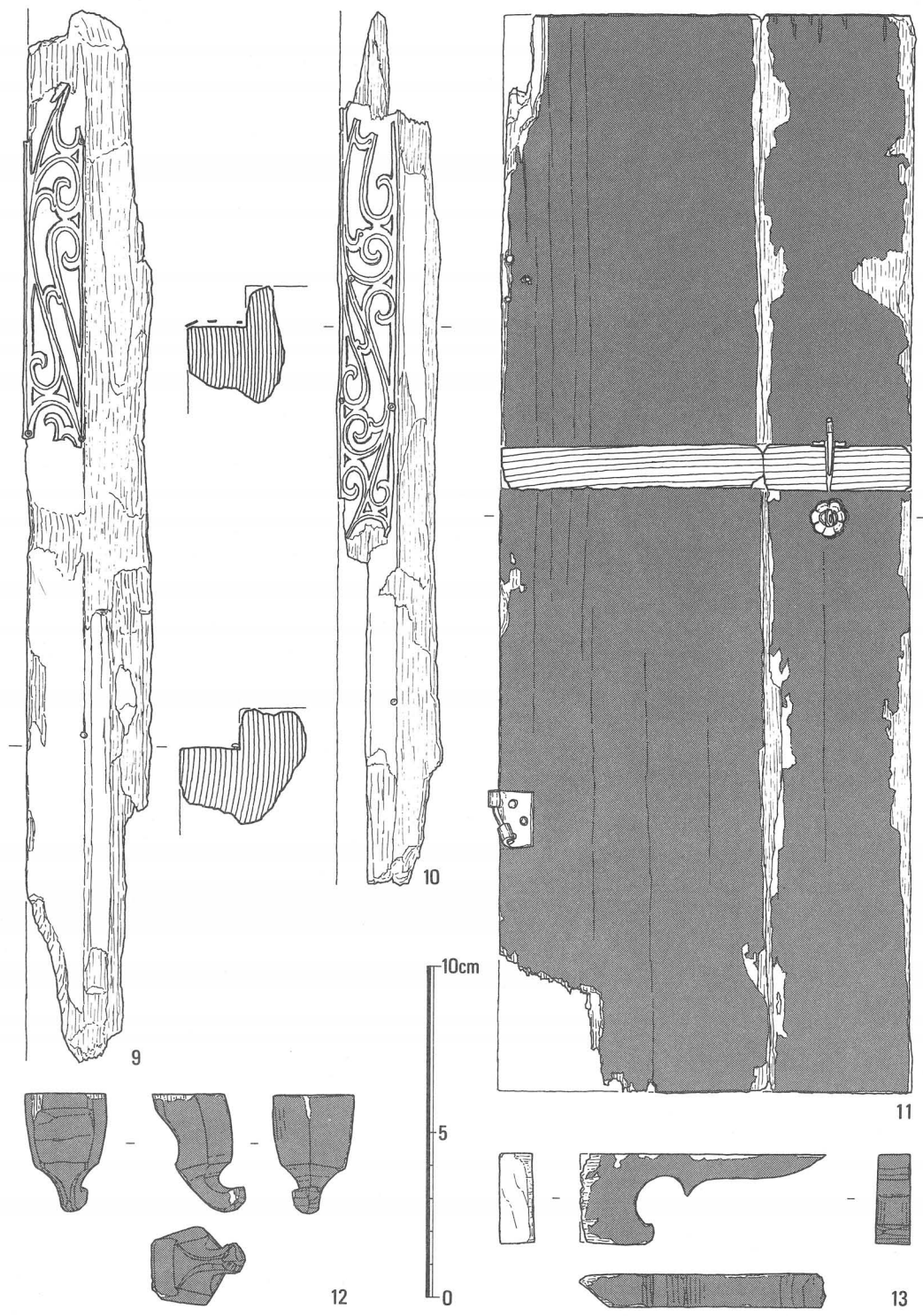
金属器には銅板五尊像・押出仏・唐草文透彫金具(木枠付)・六弁蓮華飾金具・厨子扉の座金具と蝶番・釘等がある。銅板五尊像は、縦4.5cm、横3.7cm、厚さ0.25cmで、唐代の作品と考えられる。白鶴美術館に同型品3点があるが本品の方が仕上がりがよい。

建築部材としては、回廊に関わるものとして、地覆が3本、東雨落溝に大斗・肘木・垂木各1個があったに過ぎない。ただし垂木は明らかに反り増しがあり、これが当初材とすれば飛鳥時代の垂木に反り増しがあることになり、取り替え材とすれば、かなり大がかりな修理があったことになる。宝蔵からは明らかな建築部材としては茅負5点が出土している。隅の留めに切った部分もあり、宝蔵が入母屋造か寄棟造であったことを示している。茅負に近接して軒丸瓦Cと四重弧紋軒平瓦Bの軒瓦が散乱しており、この組み合わせの軒瓦が葺かれていたことが知られる。ただ茅負以外の建築部材が全くと言っていい程見あたらないのは不審である。宝蔵はまず軒から落下し、軸部はなおしばらく健在であったために、その部材が持ち去られて他に転用されたことも想定できよう。

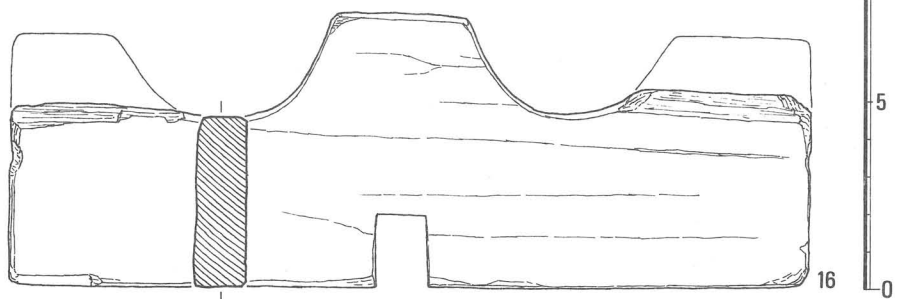
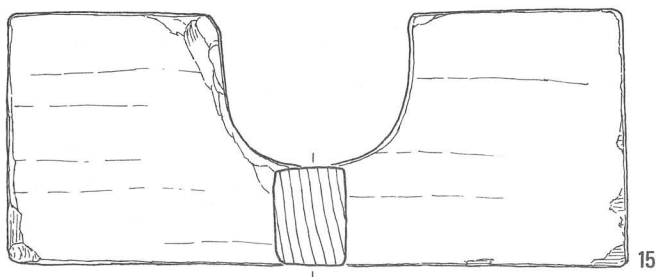
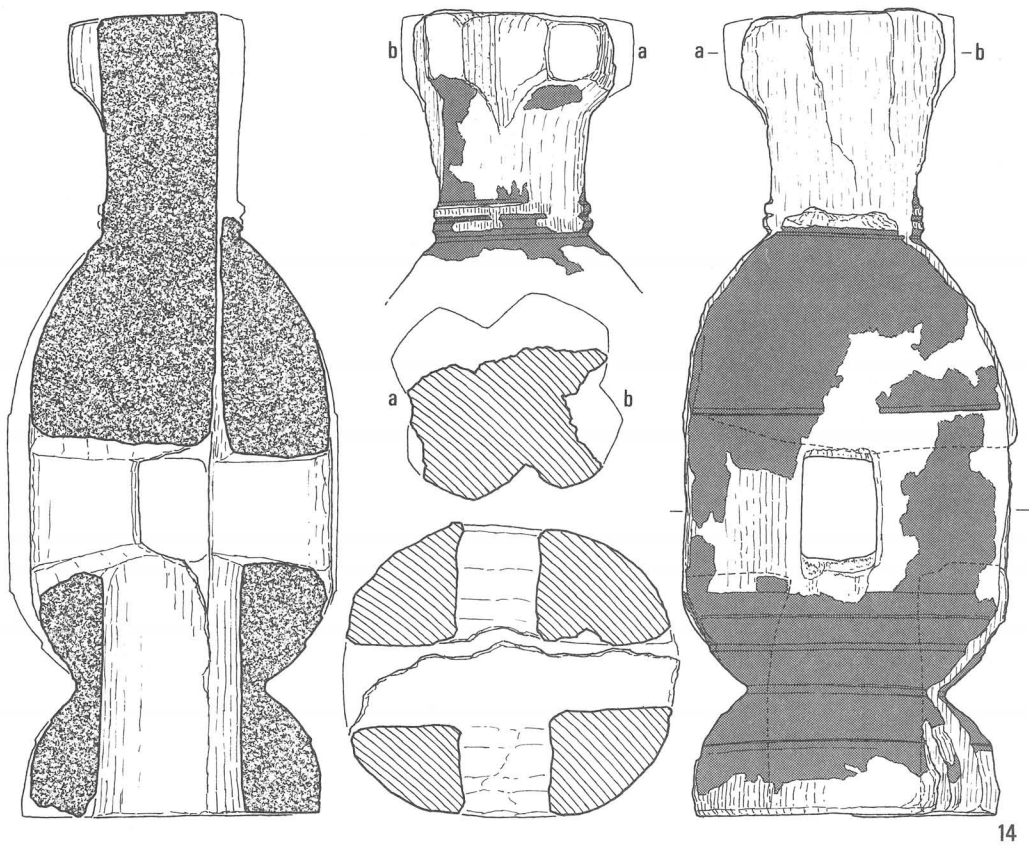
木簡 宝蔵基壇上面から1点、同雨落溝から6点の木簡が出土した。釈文は85頁に掲げる通りである。①は宝蔵基壇上面から出土した経帙の題籤で、石川年足が天平11年7月に書写させ、「浄土寺」に安置した大般若経六百巻に付けられていた可能性が高い。①から④は、宝蔵での經典の出納に関わる木簡と考え



出土木器① (1・2 : 茄子形仏具, 3 : 素木経軸, 4~6 : 漆塗経軸, 7 : 宝相華葉形仏具, 8 : 脚)



出土木器② (9・10: 唐草文透彫金具付厨子, 11: 厨子扉, 12・13: 脚)



出土木器③ (14 : 華瓶形仏具, 15・16 : 部材)

られる。③から山田寺の三綱の名前の知られること、②から出納の管理に「倉人」があたっていたことが知られること、④は貸借状況のチェックが行われた記録であるらしいこと等、奈良時代後半から平安時代初期の山田寺の組織や活動の一端が窺える貴重な史料である。

まとめ

回廊については北端に扉口の付くこと・垂木に反り増しのあること、が新たな知見として加わった。回廊の建物については従来、地覆石を9世紀前半から中頃に抜きとって、不同沈下を防ぐために瓦・礫等を詰め込んでおり、地覆石の抜き取りは腰壁の改修に伴うものかとされてきた。しかし腰壁を改修するためにわざわざ地覆石を抜き取る必要は必ずしもなく、そのことによって建物の足元が弱くなるのは明白であるから、甚だ不審な仕事と言わねばならない。このような足元の大改修があったならば、建物も解体されないままでいたかどうか疑問が生じてくる。建築部材の再検討も含めて今後の課題である。

宝蔵の発見も、初めて山田寺の僧侶の生活に関係する施設を見出した点で重要なものであった。『多武峰略記』には経蔵跡の記載があるが、今回検出した建物がその経蔵にあたるか否かは解らない。しかしその内容物・出納の実態などが知られた点は貴重である。宝蔵はその所用瓦から7世紀後半の創建で、回廊等と同様10世紀末には廃絶していたと考えられる。

西限の塀の検出により、伽藍を囲う区画がほぼ確定したと言ってよい。その規模は東西118m、南北187m、となる。西門は3間の規模ではあるが棟門程度の簡略なものであった。なお東限の塀の東にはなお寺の関係施設の存在が想定されており、今回は調査が及んでいないが西限塀の西にも寺関連の施設がないとはいえない。その意味で寺域の広がりについてはなお不明とせざるをえない。

5 その他の調査概要

A 石神遺跡1990-1次調査

(1991年1～2月)

この調査は農小屋新築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は、石神遺跡第2次調査区(概報13)に北接する水田である。調査区は、最終的に南北6.5m・東西9mになった。層序は、上から耕土・床土で、南半ではその下がすぐ黄褐色砂質土の地山、北半では約10cmの暗褐色土があいだに挟まる。遺構の検出は黄褐色砂質土の上面で行った。

7世紀中頃の遺構 掘立柱塼と溝がある。

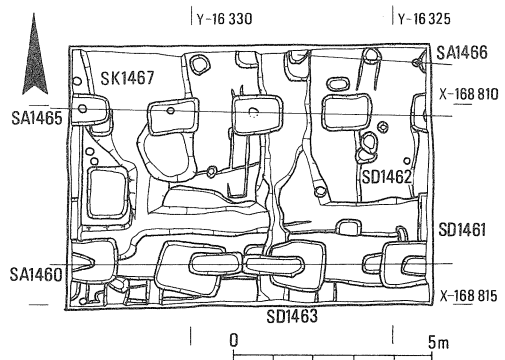
SA1460は、東西に伸びる掘立柱塼で、3間分(8.0m)を検出した。柱間寸法は約2.67mである。柱掘形は一辺1.0～1.5mで方形を呈し、深さは現状で約0.7m、柱はどれも抜きさられていた。なお2つの柱穴に対して、その真中から2方向に伸びる抜取り穴を掘って柱を抜いている。

SA1465も、東西に延びる掘立柱塼である。4間分(8.4m)を検出した。直径25cm前後の柱痕跡がみつかっており、柱間寸法は2.1mである。柱掘形は一辺0.8～1.3mで、東西に長い長方形を呈す。深さは、現状で約0.6mである。

SD1461は、幅約2.4m、深さ約0.5mの素掘りの東西溝である。一部が中世の溝と重なっている。埋土は、暗茶褐色土、山土混茶灰褐色粘質土で、水の流れた形跡はない。なお重複関係から、塼SA1460抜取り→溝SD1461の順につくられている。

7世紀後半の遺構 SK1467は南北3.5m以上・東西約2.5m・深さ0.3mの土坑である。埋土から遠江産の平瓶のほか、飛鳥IV期の土器が出土した。

このほかに、古墳時代の小穴、中世の塼SA1466・溝SD1462・1463などを検出した。



石神遺跡1990-1次調査遺構配置図

本調査区では、大きな柱穴が密集してみつかった。これらが堀の柱穴ではなく、建物の一部の可能性もある。周辺の調査の進展に待ちたい。

B 飛鳥寺1989－5次調査

(1990年2月)

この調査は住宅の増改築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は飛鳥寺講堂の東北方にあたる。1.7×5.3mの南北トレンチ調査の南三分の一付近で地山の下がりを検出した。埋土に瓦片を多数含み、あるいは東西溝の北半の可能性もある。

C 山田道周辺1990－1次調査

(1990年4月)

調査地は奥山久米寺南方約250mの位置で、「山田道」推定地にあたる。調査は東西2m・南北3.5mの調査区を設定して行った。地表下約0.7mの明灰褐色土の上面で中世の南北小溝4条と土坑1基を検出したが、山田道に関連する遺構は確認できなかった。